

---

# **少年の異世界戦記～ゼロの使い魔編～**

クロイツヴァルト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少年の異世界戦記（ゼロの使い魔編）

### 【Zコード】

Z0842P

### 【作者名】

クロイツヴァルト

### 【あらすじ】

少年は数々の世界を渡り、自身の前に現れた鏡によりまた新たな世界へと介入するのである。

## プロローグ（前書き）

やつてしましました！…ゼロの使い魔編、主人公がサイトの代わりになつて行つたらどうなるか？作者も思い付きの為、予測出来ません。

## プロローグ

俺は今、自身の田の前の背の小さくピンクブロンドの人物に対し困惑していた。

戒『（昨日は確か冥夜達とデッドラースを繰り広げて辛うじて生き残つて部屋で寝た筈、何だが何故目の前にこのちびっ子ルイズがいる！？そもそも俺はいつ戻されていたんだ？寝た後の記憶が無い事から寝てる最中か。）……最悪だ。』

戒が落ち込んでいる中ルイズとおぼしき少女は近くにいるでかい杖を持つた教師に話をしていたが、戒は普通にスルーしていたがルイズが近づいて来て未だ座った状態の戒に目線をいやがむ様にして合わした。

ルイズ「（よく見れば中々ねーー）こ、光榮に思いなさいよ。／＼平民如きのアンタがき、貴族の私と契約出来るのだから。／＼「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブ・ランド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司りしペンタゴン。この者に祝福を。我の使い魔となせ」

ルイズは顔を少し紅潮させながらそう言いながら、使い魔の契約たる呪文を朗々と透き通る様な声で唱えてコントラクト・サーヴァント、所謂キスをしたのである。

ルイズ「コルベール先生、契約し終わりました//。」

そして、数秒が経ちルイズが顔を赤らめながら「コルベール」と呼ばれた黒いローブを着た中年の男性がルイズに話し掛けた。

コルベール「サモン・サーヴァントは何度も失敗してましたが、コントラクト・サーヴァントは無事成功したようですね？」

「そいつが平民だから契約出来たんだろう？」

「ゼロのルイズに幻獣種が契約出来るもんか！？」

「ゼロのルイズは平民の使い魔がちょいちょい良いんだろう？」

「あの方の瞳、とても綺麗ですわ／＼」

戒『ぐつー？』

コルベールがルイズに嬉しそうに話し掛け、それに茶々を入れる生徒の会話を傍観していたら（一人は全く違うが、遠目から分かる物なのか不思議だが）急に左手の甲が焼かれる様な熱さに襲われ戒は思わず唸ってしまった。

ルイズ「じつとしてなさいよ？ただ、使い魔のルーンが刻まれるだけなんだから。」

戒『い…言われなくとも…わかっている（そつは言つがかなりキツい物のだがな）』

そして漸くして身を焼くような熱さが引き手の甲にルーンが無事に刻み込まれていた。それに伴いコルベールが近付いて来た。

コルベール「ほう、珍しいルーンですか？少しきかせて貰いますね？」

コルベールはそう言つと懐からスケッチブック（明らかにローブ内に收まら筈）をペンと共に取り出すと戒の手の甲にあるルーンを見て写し始めた。

コルベール「さて、これで春の使い魔召喚の儀式は終了です。この後は教室に戻つて通常の授業になりますので遅れない様にして下さいね？」

コルベールはそう言いながらコモン・マジックのフライを唱え教室に向かい飛んでいった。それに倣うように他の生徒達もフライを唱えて飛ぶ中でルイズにちょっかいを出す者もいた。

「ゼロのルイズは歩いてくるんだね！」

「コモン・マジックすら唱えられない、ゼロのルイズは平民がお似

合いだね！』

戒『これから、俺はどうなるんだ？』

そう言って飛んでいく生徒達を見ながら俺とルイズは見ていくしか無く、俺は他人事の様に考えていたのであつた。

## プロローグ（後書き）

次回はルイズの部屋での会話です。その後は原作どおりの流れに沿つて行きたいと思います。また、Muv-Luv Alterna tive編の息抜き程度なので亀更新になりそうですのでご了承下さい。m(—)m

## 第一話（前書き）

召喚された日の1日目が終了です。ゼロの使い魔を書き始めたクロイツヴァルトです。此方は気分転換で書いてるので亀更新になると思われます。

## 第一話

今俺はあの後ルイズの部屋に連れられて來た。

ルイズ「で、あんたの名前は？」

戒『俺の名は黒逸戒、コチラの言い方だとカイ・クロイツになるな。』

『

ルイズ「ふうん。変わった名前ね？」

ルイズの問いに戒は自分の名前を言つたら変わった名前と言ひ訝しむ様に見た。

戒「所で俺は使い魔になつた訳だが何をすれば良いんだ？」

ルイズ「使い魔は主に目や耳となる能力が付き、主人が望む秘薬になる物やそれに準ずる物を探して来るのよ。」

戒『秘薬？エリクサーみたいな物か？』

ルイズ「何それ？」

戒『所謂、万能薬みたいな物だよ。俺の世界にある伝承にある物であらゆる病や呪いを瞬時に完治させる幻の秘薬とされる物。』

ルイズ「そんな物、水のスクウェアクラスのメイジでも作れないわよ！？』

戒『だから伝承だと呟つたら? 架空や伝説の中に存在する物だからな。』

ルイズ「そつ。で、使い魔にとつてこれが一番重要な仕事で主人の楯や剣となり護らなければいけないのだけどアンタには無理でしょうね。」

戒『まあ、 そうなるかな?』

ルイズ「全く、 どうしてアンタみたいな平民を使い魔にしちゃったのかしぃ。」

戒『俺は何故、 違う世界から召喚されたのかが不思議なのだが?』

ルイズ「さつきから違う世界つて言つてるけど、 どうこう事?』

戒『ルイズのいる世界と俺のいる世界は確実に別世界と断言できる。』

ルイズ「どう違うの?』

戒『一番に挙がるのは世界が荒廃していない事。一番田には魔法が無く科学が発展していた事、 最後にBETAが居ない事だ。』

ルイズ「魔法が無い世界ですつて! ? それに科学つて何よ? BETAってのも気になるけど……。』

戒『まあ、 詳しい事は今度話すよ。今はもう夜遅い訳だから寝なきやだろ?』

ルイズ「…それもそうね。」

戒の言い方に若干不満を持ちながらも正論の為に文句を言わなかつた。そして、いざ寝ようとしたらルイズから声を掛けられた。

ルイズ「ちょっと。着替えるから手伝いなさいよ！」

戒『君は男である俺に女性の着替えを手伝わせるのが趣味なのか？』  
ルイズ「使い魔は召使いと同義なの。それに使い魔に見られてもどうって事無いわよ。』

戒『君がそう言つなら異論はないが。』

ルイズ「後、これを明日の朝に洗濯をして頂戴。」

ルイズはそう言つて自分が着ていた服を戒に投げ寄越した。

戒『解つたよ。』

ルイズ「やけに素直ね？」

戒『仮にも住まわせて貰うのだから、拒否はしないよ。』

ルイズ「そう、あなたの寝床ならそこのは藁の上だから。お休みなさい。』

戒『藁は要らないぞ？俺は座つて寝るからな。』

ルイズ「眠り辛く無いの？」

戒『今までの生活で慣れているから此方の方が楽だよ。』

ルイズ「私には解らないわね。」

戒『ま、他人からは判らない物だよ？お休み。』

戒はそう言って口を開じると静かに寝息を立てていた。

ルイズ「本当に寝てる…クロイツって言つたけどほんとに何者なのがしら？……考へてもしようがないわね。」

ルイズは戒が寝てるのを確認し改めて黒逸戒と言ひ自分の使い魔について考へていたが今は考へても仕方ないとして自分も寝るのであつた。

## 第一話（後書き）

次回は決闘まで持つて行こうと思っています。

## 第一話（前書き）

初めからタバサやキュルケが絡んだ話になってしまいました。とりあえず次回はギーシュとの決闘直前までの話になります。

## 第一話

まだ太陽が顔を出す前の時間に戒はサモン・サーヴァントが行われた庭に来ていた。

戒『日課の鍛錬をするか。』

そう言って、投影しておいた耶将・莫耶を使って前の世界にいる闘士級を10体程を仮想敵として鍛錬をした。

時に弾き、避けそして双剣の連撃で屠つていった。

戒『こんな物かな？…ん？彼処か。』

戒はあまり汗を流さずに鍛錬をしていたが途中で視線を感じて探しと学院の方からで魔術で視力を強化し詳しく探ると学院の塔に当たる部分から自分を見ている鮮やかな青色の髪をした少女が此方を見ていた。

戒『（タバサか？手でも振つてみるか？）』

戒が訝しく思いながらも手を振るがタバサは直ぐに引っ込んでしまつた。

戒『何か不味かったか？…そろそろご主人様を起こさないとだな。』

戒はそう言って広場を後にした。そして時を少し遡り、タバサの部屋。

タバサ「……ん。」

タバサは何か不思議な感じがして眠たげな感じの蒼色の目を擦りながら目を覚ました。

タバサ「何…？」

タバサはベッドから起き上がり自分のベッドの近くにある自信の背丈以上の杖を持ち、窓際まで行き外の様子を伺つたがまだ陽が昇つておらず広場の様子は月明かりで少し見える位であったが人が居るのが判つた。

タバサ「よく…見えない。」

そう言つて私は杖を使いコモン・マジックで視力を強化し広場をもう一度見た。そこには昨日ヴァリエールが召喚した使い魔が見た事の無い双剣を使い踊つているかの様に動いていた。

タバサ「綺麗…。」

彼の見た事の無い双剣を使った洗練された動きに魅入つていた。

タバサ「何か探してる…？」

そして、その舞の様な物が終わり少しして彼が何かを探す様な動きをしたので不思議に見ていると不意に彼がこちらを見た事に私は驚愕した。

が、タバサは次の瞬間に再び驚愕するのであった。

タバサ「！？（気付かれた！？）」

私は直ぐ様窓際から離れた。

タバサ「不思議な感じ…彼は何者？」

私は不思議な感覚を覚え自問自答していた。

タバサ「会えば少しばら…？」

タバサはそう自己完結すると再びベッドに戻り眠るのであった。

そして場面は再び戒に戻る。

戒『やはりと言うか、未だに寝ていたか…。』

戒が鍛錬を終えて部屋に戻るとルイズはベッドで幸せそうに寝ており、戒はそんなルイズを見て嘆息しつつ起こす為にルイズの身体を揺すつて声をかける。

戒<sup>マサニ</sup>おーい。ルイズ?朝だぞー?

ルイズ「うるさいわね～？つて誰よアンタ？」

戒<sup>マ</sup>（天然か？）昨日、君が召喚した使い魔だが？もしや、お忘れかな（笑）』

戒かそう言つてゐるとライスかヘットから鼻を起こし 鮮色の瞳を  
眠たそうに擦りながら文句を言つたと思つたら自身が喚んだ使い魔  
の事をド忘れしていた。

戒『そうか、なら良いが…それより早く着替えなくては朝食に間に合わないのではないか?』

「わ、わかってるわよ！？」

戒はルイズに着替えを渡しながら聞くと少し焦りながらも手早く着替えて下着類を俺に投げ寄越した。

ルイズ「後でそれも洗つといでよね?」

『わかつた。とりあえず部屋を出ようか。』

ルイズ「ちょ、ちょっとは待ちなさいよー！」

ルイズの言葉に戒が肯定し部屋を出るがルイズが怒鳴りながら後を追つた。

戒『そう朝からピリピリしても楽しくないぞ?』

ルイズ「誰の所為よ!! だれの!!」

戒とルイズが部屋を出て話していると隣の部屋のドアが開き出て来たのは燃える様な長髪に褐色の肌で見事なプロポーションをした女性と彼女の使い魔であろう尻尾に火を灯した火蜥蜴が出て來た。

???? 「あら? ゼロのルイズじゃない。こんな所で何をしてるのかしら？」

ルイズ「ツェルプスター!? アンタには関係の無い事よ!!」

戒『だから、ルイズ朝から騒いではいけないと言つてるだろ。』

キュルケ「ふうん、コレがアンタの使い魔ね? ゼロのルイズらしこんなじやない? 私の名前はキュルケ、微熱のキュルケよ?』

戒『失礼をミス・キュルケ、私の名はカイ・クロイツとあります。それにしても見事な火蜥蜴だな。』

キュルケ「変わった名前ね? それにしても判つてるじゃない。私のフレイムは凄いわよ。なんたつて火竜山脈に生息しているサラマンダーよ? その道の人を見せたら相当な額を付けてくれるでしょうね~』

ルイズ「アンタは自分の使い魔の自慢がしたい訳なの? それとも私を馬鹿にしたい訳!!」

戒『だからルイズ、話をするなら少しは声量を落としてからだな?』

キュルケ「…アンタの所の平民ってば何か変ね?」

ルイズ「何かじやなくて、確実に変よーー!」

戒『本人の目の前でそれを言つかな?しかしルイズ?早く食堂に行かないどじやないのか?』

ルイズとキュルケの口喧嘩?を仲裁しつつ戒ルイズの矛先が自分に回つて来る前に食堂に移動する為に進言した。

ルイズ「そよう…?ツェルブストーなんかの相手をしてる場合じやないわよ!!さつさと行くわよ!!」

ルイズは怒鳴りながら食堂に向かつて行つた。

戒『(世話の掛かる奴だな)ではミス・キュルケまた後程。』  
そう言つて戒はルイズを追つて行つた。

キュルケ「カイ…か。不思議な人よね、フレイム?」

キュルケが自身の使い魔に言つたがフレイムはキュルキュルと鳴くだけであつた。

そしてルイズを追つてアルヴィィーズの食堂に着いた戒はその広さに驚愕していた。

戒『無駄に広いな?』

ルイズ「何を言つてるの?この位の広さじやないとこの学院の生徒が全員入らないわよ?」

戒『そんな物か?』

ルイズ「そんな物よ。」

戒『ところで俺の食事は床に置いてあるアレか?』

ルイズ「当たり前でしょ?この食堂は貴族の者だけが入って良い所で使い魔で尚且つ平民のアンタが入れる場所じゃないのよ?私の計らいでこの食堂に入れて上げて、食事まであるのよ?感謝しなさいよ。」

そう言ってルイズは食事の席に着いた。全員が揃い原作でも言つていたブリミルと女王陛下への感謝をしてから食事を始める。

戒『(まつ、文句を言つても仕方ないな。)頂きます。』

しかし量が少ない料理の為に戒の食事はすぐに終わってしまった。

戒『なあ、ルイズ?』

ルイズ「なによ?」

戒『少し外に出て来るが良いか?』

ルイズ「まあ、授業の時にはちゃんと戻つて来れば良いわ。」

戒『了解した。』

そして戒はヴエストリ広場に来ていた。そこには巨大な蛇やグリフォンに果てはバジリスクまでもがいた。

戒『幻獣や魔獣のオンパレードだな。ん?...アレは。』

そう言って戒が嘆息している傍ら忙しなく動くメイドがいた。

戒『お~い、ちょっと良いかな?』

？？？「あつ、はい。貴族様、何でしょうか？」

戒『あ〜、スマンが俺は貴族では無くて使い魔なんだよ。』

？？？「では、あなた様がミス・ヴァリエールに召喚された御方なんですね！？」

戒『あ、ああ。そんなに俺は有名なのか？それと君の名前は？』

シエスタ「あつ！？申し訳ありません！－私はこのトリステイン学院でメイドをやっているシエスタと申します。」

戒『俺はルイズの使い魔をやっているカイ・クロイツだ。今は使い魔の餌やりって所か？』

シエスタ「はー。多く食べる使い魔もいますから一度に大量の食事を運ぶ物で皆さん忙しく動いているのです。」

戒『なら、俺も手伝うぞ？』

シエスタ「そ、そんなミス・ヴァリエールの使い魔さんに私達の手伝いなどさせる訳には！？」

戒『忙しく、大変なんだろ？それに俺も暇だからやらせてはくれないか？』

シエスタ「…判りました。なら、食堂に使い魔用の食事がカートで用意してありますのでお願いします。」

戒が手伝うと言つとシェスタは貴族の使い魔にメイドのやる仕事はさせないと言つたが戒が頑なにやらせてと言い、シェスタの方が折れて食事の運搬を頼む事にした。

戒『すいませ～ん！～！コック長はいますか～？』

戒はアルヴィーズの厨房にて来ており、使い魔の食事を運ぶ為にコック長に聞くために入り口で声を上げた。

？？？「誰でい！？」

戒『シエスタに頼んで使い魔の食事運搬を手伝わせて貰いに来た。カイ・クロイツだ。』

マルトー「俺の名前はマルトーってんだ。それにしてもシェスタにか？あいつが人に頼むか？」

戒『そこは俺が暇を持て余してたから手伝わしてくれと言つたんだ。』

マルトー「そうか。なら、あそこにあるヤツを頼むぞ？」

マルトーがそう言つて指差した先には人が入れる程の大きさがある籠いっぱいの使い魔用の食事が入つていた。

戒『あれか？』

マルトー「おうよー。あれが貴族の使い魔に食わせる飯だ。』

戒『わかつた。広場まで運んでシエスタ達に渡せば良いのか？』

マルトー「ああ、後の事はシエスタ達の方が要領がわかっているからな。」

戒『了解、任せてくれ。』

戒はそう言つて籠を片手で持ち上げて広場に向かつた。そんな戒をマルトーは呆気に取られていた。

マルトー「……人は見かけに選らねえな。」

戒『おい、シエスター？ いつ何処に置くんだ？』

シエスタ「あ、使い魔さん！！此方に置いて貯えますか？」

戒『了解）。あつー？ そつだ、シエスター？ ちょっと聞きたいんだが良いか？』

ヴェストリ広場の中央辺りに置いて戒は何かを思い出したかの様にシエスタに聞いた。

シエスタ「どうしました？」

戒『衣服の洗濯場は何処にあるかな？』

シエスタ「それでしたら私が後で洗濯してお部屋まで運びますから良いですよ？」

戒『頼んでしまって良いのか？』

シエスタ「はい。それがメイドである私達の仕事ですから」

戒『ありがとう。実際、どうやれば良いか判らなかつたから助かるよ。今度お礼かもしくはシエスタが何か困つた事があつたら助ける

よ?』

シエスタ「そ、そんな!？お礼など貰えませんよ!—」

戒『なに、困った時はお互い様つて事でな?』  
シエスタ「わかりました。では、何か困ったら使い魔さんにまた手伝って貰いますね?』

戒『ああ、俺はそろそろルイズの授業について行くから退散するな。』

『

シエスタ「はい、お気をつけて下わい。』

戒はシエスタと別れてルイズの行く教室に向かつ途中でピンクブロンドを揺らしながら此方に近づくルイズを見つけた。

戒『いま、も…』

ルイズ「何処に行つてたのよ!？探したじゃない!—』

戒『ルイズ?俺は確か食堂を出る前に広場に行く事を伝えた筈だが?  
?』

ルイズ「そうだったかしら?』

戒『忘れたのか?』

ルイズ「忘れた訳じゃないわ!—ただアンタが忘れてないか確認しあだけよ。さつさと行くわよ!—』

戒『まったく、私のご主人様は忙しないな。』

ルイズに急かされて戒は教室に入った。教室の中は教壇を下にして生徒が座る席は上に向かつて階段上で講堂の様な外觀になつていた。

ルイズ「アンタは使い魔なんだから席は無いわよ。」

戒『じゃあ、私は邪魔にならぬ様に壁際に移動しておくよ?』

ルイズ「あら、気が利くじゃない。そうしてくれると助かるわ。」

ルイズの言葉を聞き戒は上段に位置する窓の近くの壁を背もたれにして授業が始まるまで目を閉じて自分の使用可能な能力を確認していたが、誰かに服を引っ張られ意識を此方に戻し確認する為に目を開けて最初に飛び込んで来たのが青い髪に丸渕のメガネをかけた少女であった。

戒『どうかしたか?』

タバサ「…タバサ。」

戒『ああ、名前か?』

タバサ「ん…。」

戒『すまない、私はカイ・クロイツと言ひ名前だ。』

タバサ「そう…。」

戒『授業が始まる。席に着いた方がよろしいのでは無いか?』

タバサ「あなたも座る。」

戒『私は使い魔だから座る事は出来ないよ?』

タバサ「…座つて。」

タバサが席に座る様に言つてきたが、それを戒は諭す様に断るがタバサは此方をその青い目で見つめて頑なに座る様に言つてきた。

戒『ですが、座る所はどうするんですか？』

タバサ「…隣。」

戒『よろしいので？』

タバサ「いい…。」

そしてタバサに言われるが儘に隣の席に着いた所で教室の扉が開き少しふくよかな女教師が入ってきた。

戒『誰だ？』

タバサ「シュブルーズ、トライアングルのメイジ。」

戒『なる程。』

タバサの紹介で戒は納得した。

シュブルーズ「皆さん、春の使い魔召喚の儀は大成功の様でしたね？私は新学期には様々な使い魔を見れる事がとても楽しみなのですよ。」

シュブルーズの言葉を聞き、戒はルイズを見ると案の定俯いていた。

戒『（やれやれ、あれは確實に気にしてるな。）』

戒の内心を知るはずもなくショブルーズは話を続ける。

ショブルーズ『おやおや、変わった使い魔を召喚したようですね？  
ミス・ヴァリエール。』

その言葉に教室中に笑いが起こる。

「おー、ゼロのルイズ！－召喚出来なかつたからって平民を連れて  
くるなよ！－！」

ルイズ「違つわ！－ちゃんと使い魔は召喚したわよ！－ただ、アイ  
ツが出て来ただけよ！？」

「嘘つくなよ。×サモン・サー、ヴァント×が出来なかつたんだろ！  
！」

そう言つて教室中が更に笑いが起きる。

ルイズ『ミセス・ショブルーズ侮辱されました！－がぜつぴきのマ  
リコルヌがわたしを侮辱しました！？』

そう言つてルイズは握り拳を作り机を叩いた。

マリコルヌ「誰がかぜつぴきだ！？風上のマリコルヌだ！風邪なん  
か引いてない！」

ルイズ「アンタの声はガラガラ声なんだからかぜつぴきがちょうど  
いいのよ！？」

マリコルヌと呼ばれた男子生徒は立ち上がりルイズを睨みつけた。そして、そんなルイズとマリコルヌを止める為にシユブルーズは自身の杖を使おうとした時に教室中をとてつもない殺気が覆う様にして放たれた。

タバサ、シユブルーズ、マリコルヌ「「「！？！？！？」」

ルイズ「？」

その殺気に気づいたのは教師であるシユブルーズに殺気を向けられたマリコルヌ、そして戒の隣に座っていたタバサである。そんな重い空氣の中で戒は怒氣を孕みドスの効いた声で話すのであった。

戒『おい、小僧！！我が主人を侮辱するとは何事か！！私を侮辱するなら我慢もできよう。しかし！！主人を罵倒したとあらば私は許さん！！そしてシユブルーズだったか？貴様も教師なら生徒を馬鹿にする様な言動をしてどうする！！教師とは生徒に授業をしてやるだけでは無い筈だぞ！！』

戒の物凄い剣幕に当初は激昂していた筈のルイズでさえ呆気にとられ教室中は急に静かになっていた。そして漸くしてから現実に戻つてきたシユブルーズが戒に対して謝罪してきた。

シユブルーズ「教師のあるまじき行為でしたね。ごめんなさい。」

戒『私にでは無く、主人のルイズにして貰いたい。』

シユブルーズ「そうね、『めんなさいね。ミス・ヴァリエール？』

ルイズ「そ、そんな、私は別にそこまでは。」

「マリコルヌ」…………。

「シユブルーズ先生ー? マリコルヌが立つたまま氣絶していますー?  
?」

シユブルーズ「 すぐに」

戒『少し待て。』

シユブルーズが生徒に指示をしようとした時、戒が上段から下りてきて氣絶しているマリコルヌの近くまで来た。

戒『まったく』の程度で氣絶するとは…

シユブルーズ「何をするのです?」

戒『なに、田を覚まさせるだけですよ。』

そう言い戒は懷より紙袋を取り出し袋の入り口から息を吹き込みパンパンに膨らませて一気に叩き潰した。

”パアツーノ”

「マリコルヌ」 !?

その音に生徒達はびっくりし、田の前にいたマリコルヌはその音で田を覚ました。

戒『田、覚めたか?』

「マリコルヌ「は、はい！？」すいませんでした！…」

戒『謝るのは私ではない。貴様が馬鹿にした我が主人だ』

マリコルヌ「ル、ルイズ、さつきはごめんなさい。」

ルイズ「い、いいわよ。もう気にしてないから。」

マリコルヌはルイズに謝罪をしたが当の本人は先程の出来事で毒気を抜かれた様で気にしていない様子である。

戒『ミセス・シュブルーズ、邪魔してしまってすまみません。私を気にせず授業を再開して下さい。』

シュブルーズ「いえ、いいのですよ。私も教師として見習う所がありましたから逆に感謝します。さて、授業を再開しますよ？』

戒の言葉にシュブルーズは逆に感謝を述べ、授業を再開した。

シュブルーズ「わたしの二つ名は赤土。赤土のシュブルーズです。土系統の魔法を、この一年、皆さんに講義をします。ミスター・マリコルヌ、系統魔法はいくつありますか？」

マリコルヌ「は、はい。ミセス・シュブルーズ。火、水、土、風の四つになります。」

シュブルーズ「後は失われた系統魔法である虚無を合わせて五つあるのは皆さんもご存知ですね？その中で土の魔法は重要な役割の多くを占めているとわたしは考えています。それは、わたしが土系統だから、というわけだけではありませんよ。もちろん、わたしの身びいきでもありません。」

シュブルーズはそう言つて一息ついて重々しく咳をした。

シュブルーズ「土と言つのは万物の組成を司る重要な魔法であります。これが無ければ金属を作る事も出来ませんし、それを加工する事も出来ません。家を建てる為の石の切り出しや農作物の収穫など今より難しくなります。」このように、土系統の魔法は皆さん的生活に密接な関係にあります。」

戒はほお、とシュブルーズの講義を聞き、やはり世界が違うと色々な事が違う事を再確認していた。

シュブルーズ「今から、皆さんには土の基本である、練金を覚えてもらいます。一年で出来る様になつた人もいますが基本はとても大事ですので、もう一度、おさらいする事にしましょう。」

そう言ってシュブルーズは自身の持つ小ぶりな杖を石ころに向かって振り、短くるーンを呴くと石ころが光りだし、光りがおさまり、その石ころだつたものはピカピカに光る金属に変わっていた。

キュルケ「ゴロ、ゴーレドですか！？」セス・シュブルーズ！？」

キュルケが驚き、その勢いで身を乗り出して聞いた。

シュブルーズ「違いますよ？ミス・キュルケ。ただの真鎧ですよ。ゴールドを練金できるのはスクウェアのメイジだけです。わたしはただの……」

こほん、ともつたいぶる様な咳をして、シュブルーズは言った。

シユブルーズ「ただのトライアングルですから。」

戒『ただの自慢でしかないな。』

タバサ「あなたは何者?」

戒の独り言に対してもいたタバサは先程の殺氣について戒は何者かを聞いた。

戒『俺か?ただの平民だよ?』

タバサ「それはうそ。あの殺氣は平民に出せる物じゃない。」

戒のおどけた答えにタバサは即答し、普通の平民があの様な殺氣を放つ事は出来ないと言つた。

戒『では、なんと答えれば納得がいくのかな?』

タバサ「あなたの事を聞きたい。」

戒『それは使い魔としてか?それとも、戦人としてか?平民としてなのか?』

タバサ「どちらも。」

戒『ふう、まずは私の世界から話した方がわかりやすいかな?』

タバサ「あなたの世界?」

戒『ああ、私の世界はタバサ嬢達の世界とは完全に別物になつていますよ?』

タバサ「どう違うの？」

戒『まずは、このハルゲニア？でしたか？この世界と私のいた地球と言つ世界はいわば平行世界、所謂パラレルワールドつて事になりますね。こちらでは魔法が主流ですが私の世界では科学、こちらでは絡繰りになりますかね？それが発展した世界になります。』

タバサ「科学？魔法は無いの？」

戒『科学と言つのは主に機械技術等を指します。魔法の方は「」一部の者が使っていますね？ただ名称が違いますが。』

タバサ「メイジじゃない？」

戒『色々な言い方がありますね。こちらのメイジにあたる人は魔法使い、他には魔術師、この魔術師は、西洋魔術、東洋魔術の二通りがありますね。あとは私の知る魔法に関係する者達の名称はこんな感じですかね？』

タバサ「あなたは？」

戒『私か？私についてはこの枠外になるかな？』

タバサ「なぜ？」

戒『そこは側で聞き耳を立てているニス・キュルケ嬢も一緒に別の機会にしましょうね？』

そう言って戒はキュルケに視線を向けた。

キュルケ「あら？ バレたの？」

戒『当たり前ですよ？ その位判らなければ情報と言つのはすぐに広まってしまうからね？』

キュルケ「広まるとまずいの？」

戒『そうだよ？ 情報と言つのは戦闘等、色々な事柄でとても重要だからな。』

そう戒達が話している間にシュブルーズの授業は進みルイズが石の練金をする場面まで来ていた。

シュブルーズ「さあ、ミス・ヴァリエール、あなたの練金したい金属を思い描きなさい。」

そしてルイズは自身の杖を振り上げ、真剣な表情で小さくルーンを呴ぐ。

タバサ「隠れる。」

戒『何故だ？』

タバサ「いつも爆発。」

戒『私は大丈夫だ。防御用の魔法を使うからな？ もし隠れないなら私の側に居ると良い。キュルケ嬢もだぞ？』

キュルケ「じゃあ、わたしも側に行くわ。」

そう言つてタバサとキュルケは戒に寄り添う様な形で集まつた。そして…ルイズが杖を振り下ろした瞬間。

戒『（風花・風障壁）』

戒が防御魔法を唱え、目に見えない楯が現れた。そして教室中が眩い光に包まれとてつもない爆発と轟音がなり教室中は阿鼻叫喚の図になっていた。

戒『ミセス・シユブルーズは大丈夫か？』

戒の心配はもつともある。ルイズの魔法を至近距離で受けて煤まみれになり痙攣を起こしていたのだから。本人であるルイズもで倒れていたがすぐに立ち上がったがその姿は煤まみれで所々衣服が破け下着等が見えている状態であった。

タバサ「今のは？」

戒『先程、使ったのは風の防御魔法で中位クラスの物で瞬間に障壁を展開する。防御力はご覧の通りだ。』

キュルケ「にしても、あなたの風系統の魔法もだけど教室もすごい状態ね？』

そんな戒達をよそに他の生徒達は未だにさわいでいた。

## 第一話（後書き）

タバサの口調が難しくタバサらしからぬ喋り方になっていますが、  
容赦を m ( - ) m

## 第三話（前書き）

決闘の場面まで一気に書いたので投稿が遅れてしまいました。

ミスター・コルベール、彼はトリスティン学院に奉職し一十年の中堅の教師であり2つ名は「炎蛇」その名の通り火の系統に長けた人物である。彼は先のゝ春の使い魔召喚の儀式くでルイズが召喚した青年の事が気になっていた。正確にはその青年の左手の甲に刻まれたルーンが気になつて昨日の夜から今まで図書館に籠もつて書物を読み漁つていた。

トリスティン魔法学院の図書館は食堂の本塔の中に存在していた。本棚は驚愕する程に大きく、高さはおよそ30メイル程があり本棚は壁際に並んでいるのはただ壯觀の一言に尽きる。

そして、彼は、一般生徒が閲覧している区画とは別にある区画で教師のみが閲覧を許されている一区画でフュニアのライブラリーの中にいた。

一般生徒が閲覧出来る所には彼の満足する答えは無く、「レビューション」浮遊呪文を使い手の届かない所を浮かびながら担当の本を一心不乱に探していた。

そして、始祖ブリミルが使役したと言われる使い魔達の事が記述された書物をコルベールはようやく見つけその本に書かれている使い魔のルーンに関する一節に釘付けになりその部分を食い入る様につくりと読み、其処に描かれたルーンと召喚の儀で青年の左手に現れたルーンの書かれたスケッチブックと照らし合わせる。

「コルベール！」

彼は声にならない声を上げた。一瞬「レビューション」に割いていた集中力が切れ落ちそうになつた。彼は慌ててその本を小脇に抱えて床に下りると、学院長室に向かつて走り出した。

学院長室は本塔の最上階に位置しており、そこに、このトリスティ

ン魔法学院の学院長を務めるオスマンは白い口ひげと髪を揺らし、重厚な作りをしたセコイアのテーブルに肘をつき退屈そうにしていた。

ぼんやりとし、鼻毛抜いていたがおもむろに引き出しを引き中から水ギセルを取り出した。

が、この部屋の端にある席に座り書き物をしている秘書のミス・ロングビルは羽ペンを振った。

そして、水ギセルが宙を飛びミス・ロングビルの手元の前に置かれた。

オスマン「年寄りの楽しみを奪つて楽しいんか? ミス……」

オスマンがつまらなそうに呟いた。

ロングビル「学院長の健康管理をするのも秘書であるわたしの仕事なのですわ。」

オスマンは椅子から立ち上がり理知的な顔立ちが凜々しいロングビルに近づいた。そして、ロングビルが座る椅子の後ろに立ち、重々しく目を瞑つた。

オスマン「いつも平和な日々が続くとな、時間の過ごし方と言つのがとても大事な物になってくるのじゃよ。」

オスマンの顔に刻まれた皺が彼の生きてきた歴史を物語つていた。百歳や二百歳などとも言われているが実際の年齢は誰も知らず、本人も知らないかもしがれない。

ロングビル「オールド・オスマン……。」

ロングビルは羊皮紙に羽ペンを走らせながらオスマンの名を呼ぶ

オスマン「なんじゃ、ミス…？」

ロングビル「いくら暇だからと書いてわたしのお尻を触らないで貰えますか？」

ロングビルの言葉にオスマンは口を半開きにして年寄りの様な歩き方をし始めた。

ロングビル「都合が悪いとボケる振りをするのも止めて頂きたいですわ。」

「でも冷静な声のロングビルにオスマンはため息をついた、深く、苦悩の刻まれる物であった。

オスマン「眞実は何処に在るのじゃ わつか？ 考えた事はあるかね、ミス……」

ロングビル「確かに事は少なくともわたしのスカートの中には無い事です。もつともらしい事を言われていないで机の下にネズミを忍び込ませるのを止めて下さい。」

オスマンは悲しそうな顔で俯き呟いた。

オスマン「モートソグール。」

机の下から小さなハツカネズミが現れ、オスマンの足を上り、肩の上にちゃんと乗つて首を傾げた。オスマンはポケットからナツツを取り出しソグールの目の前で左右に振る。ちゅうちゅうと喜ぶ様に

ネズミは鳴いた。

オスマン「モートソグニル氣を許せるのはお前だけのようじゃ。」

ネズミはナツツを齧り始めた。齧り終ると餌を催促するかの様に再びちゅうづきゅうづと鳴く。

オスマン「どうかどうか。もっと欲しいか?ならば、くれてもいい。だが、その前に報告じじゃ。」

ちゅうづきゅうづ

オスマン「そりが、白が、純白か。しかし、儂としてはミスには黒が良く見えると思つのじや。そつは思わぬか?可憐いモートソグニルよ。」

ロングビルの眉がピクリと動いた。

ロングビル「オールド・オスマン。」

オスマン「なんじや、ミス……?」

ロングビル「次にやつましたら王室に報告いたします。」

オスマン「カーラー……王室が恐ろしくて魔法学院学院長が務まるものか——!」

オスマンは目を見開いて年寄りとは思えない氣迫で怒鳴る。

オスマン「パンツを見られたくらいで起こりなさんな。だから婚期を逃すのじやよ。ふうへへへ、若返る様じやなへへ?!!ス……。」

オスマンはロングビルのお尻を堂々と撫で回した。そして、ロングビルは椅子から立ち上がり、しかるのちに無言で上司であるオスマンを蹴り回すのである。

オスマン「ちよつー痛いー！」めんーむづ止めて！ほんともづしないから！」

オスマンは頭を抱えてうずくまるが、ロングビルは怒りが収まらない様で息を荒くしながら尚もオスマンを蹴り続ける。

オスマン「あだつ！こらー老人を！あいたつ！扱うーのはーいかんぞーマジで！痛いー！」

そんな平和な時間になんの前触れも無く闖入者により破られた。ドアがガタン！と破る様に開けられてコルベールが中に勢いよく入ってきた。

コルベール「オールド・オスマンー！」

オスマン「なんじやね？騒々しい。」

ロングビルは既に机に向かって座つており、オスマンは腰の後ろで腕を組み闖入者であるコルベールを迎えると言つ無駄な神業を見せた。

コルベール「たた、大変です！？」

オスマン「何が大変な事じや？大変な事などありわせんよ。全ての事は小さき事じや。」

コルベール「と、兎に角、ここ、これを見て下さい！？」

そう言ひてコルベールはフニーアのライブリリーから持ち出して来た古書をオスマンに見せた。

オスマン「こりゃ、「始祖ブリミルの使い魔たち」ではないか君はまたそんな古臭い物を持ち出して来おつてから。そんな事に精を出しておる位ならば、弛んである貴族共から上手い事、金を微収する手立てを考えてはどうじや。ミスター……なんじゃつけ？」

オスマンは本氣で首を傾げていた。それにコルベールは怒る様に言う。

コルベール「コルベールです！…オールド・オスマン！…お忘れに成られましたか！？」

オスマン「そうじやつた、そうじやつた。そんな名前じやつたな。どうも君は早口でいかんな？それで、コルベール君？」この古書がどうかしたのかね？」

コルベール「此方を御覧下さい。」

コルベールは戒の左手に現れたルーンの書かれたスケッチブックをオスマンに手渡した。

そのスケッチを見たオスマンの表情はすぐに変わり眼光が鋭くなつて厳しい色を見せた。

オスマン「ミス・ロングビル、少し席を外しなさい。」

オスマンの声にロングビルは席を立ち上がり、院長室を音を立てず退室する。オスマンはそれを見届けてから再びコルベールに向こう、重々しく口を開いた。

オスマン「ミスター・コルベール、詳しく説明し、聞かせなさい。」

ルイズの魔法で滅茶苦茶になつた教室の中を昼前までに片付け終わつた。片付けたルイズとカイは昼食を摂る為に食堂へ向かっていた。

カイ『ゼロのルイズ…か。』

ルイズ「なによ！あんたも馬鹿にするわけ！？」

カイ『そうじやないよ。わたしのよりも君の2つ名の方が格好いいと思つただけだよ？』

ルイズ「意外ね？あんたみたいな平民が2つ名を持っているなんて。」

カイ『でも「ゼロ」みたいな格好いい物では無く恐怖を込められた名前が多かつたな。』

ルイズ「例えば？」

カイ『…そうだな？暴君や死神に悪鬼羅刹や鬼神などと挙げれば切りがないな。』

カイのその説明にルイズは呆れた様なため息をはぐ。

ルイズ「はあ…、もういいわ。聞いてたら最悪な物しか出て来ないわね。」

カイ『だから言つただろ？畏怖を込めた2つ名だと。』

そう話をしながら食堂に向かっていると入り口の近くにタバサが立つていた。

タバサ「……。」

カイ『どうも、タバサ嬢どうかしたのですか?』

タバサ「カイとまた話がしたかったから……」

カイ『あの時の話が面白かつたのですか?』

タバサ「……楽しかった。」

ルイズ「ふん! ! なによ! ? タバサなんかにデレデレしちゃって! !」

カイとタバサが会話をしているとルイズが急に怒りだしカイを置いて食堂の中に入ってしまった。

カイ『ふむ、我がマスターはご立腹の様だな。タバサ嬢、話はまた今度にしようか。』

タバサ「……わかった。」

カイの言葉にタバサは残念そうな声で了承し、食堂の中に入つて行つた。

それを見送つてからカイも食堂に入つてルイズの近くに来た。そしてカイは自分の分の食事が無い事に気が付いた。

カイ『マスター、私の食事が無いのだが?』

カイの言葉にルイズは怒り心頭と言つた感じで答える。

ルイズ「他の女に『テレテレ』しているアンタの食事なんて無いわよ！？」

カイ『な、なんだとー？』

ルイズの言葉にカイは驚愕した。

ルイズ「使い魔のアンタは主人のわたしを放つて他の人と喋つていたのだから当然でしょ？」

ルイズは自業自得と言い食事を始めてしまった。そしてカイはそのまま食堂を出る事になってしまった。

カイ『参ったな。マスターを怒らしてしまって食事抜きとは笑えんな。』

？？？「カイさん、どうかなさいましたか？」そう言つて近くの壁を背に寄りかかっていると誰かが話しかけてきた。

カイ『君は……シェスタだつたか？』

シェスタ「はい。ところでこの様な所でどうかなさいましたか？」

シェスタの問いにカイは苦笑する

カイ『なに、我がマスターのご機嫌を損ねてしまい食事を抜かれただけだ。』

シェスタ「そうなんですか。なら厨房に来て下さい。そこならわたし達の貰い料理がありますので分けてあげれますよ。』

そう言つてシェスターはカイを連れて食堂の裏にある厨房に向かつた。厨房にはオーブンや大きな鍋がいくつも並んでおり、コックの人々が忙しく動いていた。

シェスター「此処で少し待つて下さいね？」

そう言つてシェスターはカイを厨房の片隅にある椅子に座らせて厨房の奥に消えて行つた。そして、暫くしてお皿を抱えて戻つて来た。お皿の中には湯気が立つ暖かなシチューが入つていた。

シェスター「お待たせしました。これは貴族の方々にお出しする料理の余り物で作つたシチューです。どうぞ食べて下さい。」

カイ『ありがとうございます。』

カイはシェスターの持つて来てくれたシチューを味わいながら食べた。

カイ『ふう、』馳走様。とても温かみがあつて美味しかったよ。』

シェスター「お口にあつて良かつたです。もしよろしければまたお腹が空いたら来て下さい。」

カイ『ありがと。ならその時にはまた』馳走になるよ。』

シェスター「ええ、また来て下さいね？」

カイ『何かお礼をしたいのだが何が無いか？』

シェスター「そんな、お礼だなんて！」

カイ『すまんな？これも性分な物でな？』

シェスター「それでしたら、貴族の方々に食後に出すケーキの配膳を手伝つて貰えますか？」

そしてカイは銀のトレイを受け取りシェスターと別々に貴族の人達にケーキを配つて行つた。

カイ『配膳と言つのは意外と大変なのだな？』

カイは一人納得していると少女とぶつかり、倒れそうになつた少女を倒れない様に抱き寄せた。

? ? ? 「きやつ！」

カイ『おつと…。大丈夫か？』

抱き寄せた少女を見ると田尻に涙を溜めており、カイは驚愕し焦つた。

カイ『！？どこか怪我でもしたか？』

? ? ? 「い、いえ。大丈夫ですわ！」

カイ『私はカイ。君は？』

ケティ「すいません。わたくしはケティ・ド・ラ・ロッタですわ。」

カイ『それではミス・ケティ。何故、その様に泣いておられるのだ？』

ケティ「…それは、わたくしの慕つていたギーシュ様に裏切られて

しまじ、とても悲しくてですわ。』

カイ『つまづ、一段をしていたと言つ事ですね?』

ケティ「はい。ギーシュ様はわたくしとは別にモンモランシー様とお付き合いしていらっしゃるとお噂になつていましたがギーシュ様は自分の心にはわたくししか居ないと仰つて下さつた。ですのに…」  
…「う、うう。」

ケティはカイにそう言つと泣いてしまつた。カイはそんなケティの涙を指で拭い頭を優しく撫でる。

ケティ「え……?」

カイ『安心しなさい。ケティ嬢やモンモランシー嬢の一人の悲しみは私がしっかりとそのギーシュに教えてあげるよ?』

ケティ「そ、そんな!/?危ないですわ!あなたは平民ですのに、高名な貴族であるギーシュ様にかないませんわ!」

カイ『心配は無用です。』

そう言つてカイはケティから離れて先程ケティが走つてきた道を行くと金髪の如何にもキザつたらしい少年があり何やら騒いでいて目の前には恐怖に怯えたシェスタがいた。

ギーシュ「君の所為で一人のレディが傷付いてしまつたじゃないか!/?どうしてくれるんだ!/?」

シェスタ「も、申し訳ありません。わ、わたしは別にその様なつも

りでは……。」

カイ『シエスタ、謝る必要は無い。』

ギーシュの剣幕にシエスタは怯え謝っていたが、カイがそれを遮る形で割り込んだ。

ギーシュ「……なんだね、君は？」

カイ『そこにいるメイドの手伝いをしてこる者でカイと並う。』

ギーシュ「カイ……？ああ、確か召喚の儀でゼロのルイズが召喚した平民か。なら、貴族に楯突くとどうなるか……。」

カイ『そんな事どうでも良い。貴様は一股をし、二人の少女を悲しませた、そしてあまつさえその責任をシエスタになすりつけて責任逃れを図った。男の風上にもおけないな？』

ギーシュ「野蛮な平民なだけあって貴族への礼儀を知らん様だな。」

カイ『お生憎様、貴様の様な奴に対する礼儀など持ち合わせてあらんのだがな？』

ギーシュ「良いだろ？ー其処まで言つのであれば、貴様に決闘を申し込む！…」

カイ『此処でやるのか？』

ギーシュ「ふざけるなよ。貴族の者達が食事をするこの様な神聖な場所を汚らしい平民たる貴様の血で汚したくはないのでな。ヴェス

トの広場にて待つてゐるぞ！』

カイ『ヴェストリの広場だな？』

ギーシュ「逃げずにくるんだな。」

そう言つてギーシュは羽織つたマントを翻して食堂を出でていった。  
そして先程から怯えていたシエスタを見る。

カイ『シエスタ、大丈夫か？』

シエスタ「貴族の方に喧嘩を売るなんて、死ぬのと同じですよ！？」

シエスタは怯えた声でそう言つてその場を走つて逃げてしまつた。  
その後すぐにルイズ達が近づいてきた。

ルイズ「ア、アンタなにを考えてるのよ！？貴族に平民が勝てる訳  
無いでしょ！？すぐに謝つて決闘を止めてきなさいよ！！」

ケティ「ごめんなさい。わたくしの所為でこの様な事になつてしま  
つて…。」

カイ『済まんな、ルイズ。コレばかりは譲れないよ。それにケティ  
？俺は君の様な可愛い子を泣かした時点で奴を許すつもりは無いよ。』

『

ルイズ「馬鹿よ。アンタは…。」

ケティ「そんな、可愛い子だなんて／＼

ルイズ「ちよつ、ケティ！しつかりしなさいよ！？」

カイ『さて、ヴェストリの広場に行くか。』

「平民こつちだ、ついて來い。」

ルイズ「ああ！もう！知らないわよ！？」

ルイズの言葉を聞くもカイは頑なに拒み、ギーシュが見張りに置いていったメイジについて行つた。そしてヴェストリの広場に着くとギーシュが造花の薔薇を口にくわえて待つており、その周りをローマの闘技場宣しくな感じの円形にメイジ達が陣取つていた。

ギーシュ「平民、よく逃げずに来たな。」

カイ『逃げる理由が無いのでな。それにしてもギャラリーが多いな？』

ギーシュ「君の敗北を大衆に見せる為だよ。」

ギーシュは尚も余裕な様子でカイに話しかけてきた。

カイ『お前の間違いじゃないのか？』

ギーシュ「……何時まで減らず口を叩いて居られるか見物だな！！

諸君よ！決闘だ！！」

「「「わあああああ！！！」」

「ギーシュー平民なんてぶつ殺しちまえ！」

「平民に貴族の恐ろしさを刻んでやれ！！」

カイの言葉にギーシュは眉をぴくりと動かし、くわえていた薔薇を

自身の上に掲げ、宣言をする。その言葉に周りにいたメイジ達が野次を飛ばしてきた。

ギーシュ「僕はメイジだから魔法を使わせて貰うよ。」

カイ『どうだ。俺も似たような物を使わせて貰うがな?』

ギーシュ「ふん、虚言。僕の二つ名は「青銅」青銅のギーシュだ。行くぞ!...[練金]!...」

ギーシュは造花の薔薇を振り薔薇の花弁が地面に落ちるとそれは瞬時に甲冑を着た女性の様な青銅のゴーレムが出現した。

カイ『ゴーレムか...。』

ギーシュ「どうした、平民。僕の「ワルキユーレ」に恐れをなしたか?』

カイ『いや、造形がかなり雑だと思つただけだ。』

カイのその言葉に、ギーシュは怒った。

ギーシュ「貴様!! 最初は謝れば許そうと思つたが、もう我慢ならない! やれ「ワルキユーレ」!!」

ギーシュの言葉に従い、青銅の「ゴーレム」「ワルキユーレ」はカイ目掛けて襲いかかってきた。

カイ『ふむ、雑で動きも鈍いか... 造形魔法でこれが、クラスはドットと言つた所か。』

カイがそうギーシュに話している後ろから人を搔き分けてルイズが前に出てきた。

ルイズ「ちょっと、ギーシュ！」

ギーシュ「やあ、ルイズ。ちょっと君の失礼な使い魔を借りているよ。」

ルイズ「貴族の決闘は学院では禁止されてる筈よ。」

ギーシュ「貴族…とはね？平民なのだから問題は無い筈だよ？」

ルイズ「そ、それは前例が無かったからで…」

カイ『ルイズ、下がっている。』

ルイズ「ア、アンタもアンタよー何、勝手な事をしてるのよー？」

カイ『俺はコイツに女性を泣かせた事について怒っているだけだ。』

ギーシュ「なら、どうした。」

カイ『貴様が女を泣かした事について判るまでしつかりとご教授しよう。』

ギーシュ「何を言つているー！僕の「ワルキューレ」に手も足も出ない癖に何ふざけた事を言つているんだー！」

カイの言葉に対し、ギーシュは怒りながらも「ワルキューレ」を動かしカイを襲うがカイはルイズを危なくない場所に移動させながら避けるばかりであった。

ギーシュ「平民ー避けてばかりでは僕の「ワルキューレ」には勝て

ないぞ!』

ルイズ「やつよー基本的に平民は貴族には勝てないのよー?」

カイ『ふむ…ならば、俺が我がマスターにとつて最高の使い魔だと  
言つ事を見せてやるよー!』

『ドガソシ!』

やつ面つでカイは「ワルキューレ」を素手で殴り飛ばした。

ギ、ル「なつ!?!?」

「ワルキューレ」が吹き飛ばされた事にギーシュは驚愕し動きを止  
めてしまっていた。

カイ『呆けている場合か?』

ギーシュ「良いだろ?…その余裕を無くしてやるー!』

カイの言葉で我に返つたギーシュはすぐに薔薇の花弁を全て地面に  
落とすと先程の吹き飛ばしたゴーレムと合わせて七体の「ワルキュ  
ーレ」を出現させた。

カイ『なんだ?様子見でもしていたのか?』

ギーシュ「貴様には一体で十分だと思ったが僕も我慢の限界だ!!  
僕の全力である七体「ワルキューレ」にやられるが良い!!』

そう言つてギーシュは槍や剣、斧等の武器を持たせたゴーレムを力  
に襲わせた。

” ブォン！－ ” “ ハコン！－ ” “ ドゴンシ－ ”

「ゴーレムは様々な武器でカイに襲いかかるがカイは汗一つ搔かずに避け、拳だけで一体のワルキューを殴りとばした。

カイ『やはり、破壊しないといかんか…。』

ギーシュ「素手で僕の「ワルキュー」は壊せないぞ－－。」

カイ『その様だな。』

ギーシュの言葉にカイは避けながら壊にて手を伸ばし、金色の指輪を取り出して自身の人差し指にはめる。

ギーシュ「指輪等出したからといって僕には勝てないよ？」

カイの行動にギーシュは疑問を持ちながらも自身の勝利を握るやない物と感じていた。

カイ『ふつ。その余裕が命取りだ－－逝くぞ－－。』

” ドガツ！－ ” “ バキッ！－ ”

そう言つてギーシュの近くまで周りにいたゴーレム達を拳や足を使い吹き飛ばした。

ギーシュ「何をやつても僕の「ワルキュー」には傷一つ付かないよ－－。」

カイ『それはコイツを喰らつてから言つんだな！！』リクラック・ラ・ラック・ライラックく”来たれ、雷、薙払え。』「雷の斧」！』

”ズッガーーーンッ！……！”

カイが詠唱を始めると次第に右手に白い雷が迸り直視出来ない程の光を放つそれを右手で振り七体いた青銅の「ワルキユーレ」は四体程消し飛んだ。それを見たギーシュは狼狽えた。

ギーシュ「な、何なんだ君は！？」

カイ『まだ終わっていないと言つのに、この程度で狼狽えるとは弱いな？』

ギーシュ「くつー？舐めるなよ！？平民風情がつー！」

カイの言葉で更にギーシュは激昂し残りの三体の「ワルキユーレ」を三方向から攻めた。

ギーシュ「これなら…どうだ！？」

ルイズ「カイ！？」

ケティ「カイ様！？」

その動きにルイズと後から来たケティはカイの名を叫んだ。

カイ『マスター達は何を慌ててているのだ？』

カイはいつの間にか剣を持ちその場に立っていた。

ギーシュ「なつー？僕の「ワルキューレ」は何処に…。」

カイ『それなら、貴様の後ろに一体だけは吹き飛ばしたぞ？』

ギーシュ「なにっー？」

カイの言葉に驚き、ギーシュは後ろを振り向くと確かに其処にはゴーレムが転がっていた。

ギーシュ「他の二体の「ワルキューレ」はどうしたー？」

カイ『それなら、先程の攻撃の際に細切れにしたよ。』

そう言うカイの足元をよく見ると確かに青銅の鉄屑が散らばっていた。

カイ『さて…と。』

カイはそう言つてギーシュに向かい歩き始めた。

ギーシュ「ぐ、来るなー？」

ギーシュはそう叫んで自身の後ろにいた「ワルキューレ」をカイに向けて突進させた。

カイ『邪魔だ。』

”ヒュオンー！“ “斬ー！”

”ドシャツー！“

突つ込んで来た「ワルキューレ」をカイは道端に落ちている石の様にあしらつた。そして、ギーシュの田の前にたどり着いた。

ギーシュ「あ、ああ……。」

”チャキッ！”

カイ『覚悟は……出来るな?』

カイはそつとてギーシュの田の前に剣先を待つてきた。

ギーシュ「ま、参った。降参だ。」

カイ『決闘とは命を掛けた戦いだ。降参等無いに決まっているだろう。』

ギーシュ「そ、そんな!?」

カイ『では……さよなら。』

”ヒュオン!!!!”

ルイズ「カイ!!!殺しちゃ駄目———!」

ルイズが叫んだ刹那

”ドンッ!!”

ギーシュ「?」

ギーシュは来るべき痛みが無い事に不思議に思い目を開けると自身

の横に剣が深々と刺さっていた。

カイ『我がマスターに感謝するのだな！』

ギー・シユ「は、せこい!」

ギー・シユは壊れた機械の様に何度も頷いていた。

カイ『  
だが！！』

”  
バキッ！  
”

ギーシュ一ぐはー！」

”アシヤ＝＝＝＝！”

カイそう叫んでギーシュの横つ面をぶん殴りギーシュは慣性に従い  
横に吹き飛ぶ。

ルイズ「…ア、アンタねえ！ギーシュを殴るなんて、何してんのよー！」

カイ『マスター、何をしてゐとはなんだ? ただ制裁を下しただけだが?』

ルイズ「だからって殴る必要は無い筈よ！」

カイ……マスター、忘れている様だから言つておきますが事の発端は奴の二股なのです。その制裁をちゃんとしなければ奴の為にもなりませんし彼女達の痛みも判りませんよ?』

ルイズ「だからって…」

ギーシュ「いや、その使い魔君の言つ通りだよルイズ。」

ルイズ「ギーシュまで！」

カイ『理屈だけじゃわからない、其処には拳を交えないと男と喧う者は判らないのだよ。』

ギーシュ「やつのは心の奥にまで響いたよ。』

カイ『なら、お前は次にどうするべきか判るな？』

ギーシュ「ああ、ミス・モンモランシー やミス・ケティ、それにメイド…いやシエスタ嬢に謝る事だね。』

カイ『心を傷付けられた女の子は並大抵の事じゃ許してくれないぞ？』

ギーシュ「大丈夫。しつかりとけじめとして態度や行動でしつかりと示して行くよ。』

カイ『ならば、俺からももう何も言つまー。』

ルイズ「もう一人アンタ達、訳わかんないわよーー！」

ギーシュ「諸君一人の決闘は僕の負けだーー！」

「ギーシュが負けたぞーー！」

「あの平民、さつき魔法を使って無かつたか！？」

ケティ「カイ様…素敵です//」

ギーシュは周りの者達にそう叫ぶと周りのメイジ達は騒ぎ出したが  
ケティだけかなりズレた発言をしていた。その時！

？？？「だらしないぞ！…ギーシュ！…」

そう叫んだメイジがギーシュに向かつて見えない何かを放つた。し  
かし…

”斬！！”

放たれた物はカイによつて防がれた。

カイ『風系統の魔法か…。』

ギーシュ「何をするんだ！…ヴィリエー！」

先程、カイが防いだ攻撃を見てギーシュはその生徒に向かつて非難  
の声と共にヴィリエと呼ぶ。

ヴィリエ「ふん、平民如きに負ける奴に名前を呼ばれたくは無いな  
！」

ギーシュ「ヴィリエ、それは違つぞ！…さつきの事は僕が間違つて  
いただけで彼はちつとも悪くは無い！…」

ヴィリエ「貴族が平民に負けた事自体良くない事なんだ。だから、  
その平民は僕が殺す。」

ヴィリエの言葉に広場の空気が凍つた。

ルイズ「ヴィ、ヴィリエ何言つてゐるのよー!?」

ヴィリエ「魔法の使えない「ゼロ」のルイズは黙つていろーー。」

ヴィリエの言葉にカイは静かに怒りを覚えた。

カイ『マスター、下がつてください。やたらとプライドが高い者はしつかりとそのプライドをへし折つてやらないと判らない奴が多いです』

カイはそう言ってルイズ達から離れて、ヴィリエと呼ばれた生徒に向かつて歩いていった。

## 第三話（後書き）

この後はオリジナルを混ぜたヴィリエとの決闘が入ります。

カイとギーシュの決着が付く少し前の学院長室の中でオスマンにコルベールが真剣な顔で説明をしていた。

春の使い魔召喚の儀でルイズが青年を呼び出し、「契約」した証拠として左手に現れたルーン文字が、気になっていた。

そして調べていたら……

オスマン「始祖ブリミルの「ガンダールブ」に辿り着いた、と言つ訳じやな？」

オスマンはコルベールがスケッチに書いたカイの左手にあるルーン文字を見つめていた。

コルベール「そうです！あの青年の左手に刻まれたルーンはあの伝説の使い魔「ガンダールブ」と酷似いえ、全く同じと言えます！！」

オスマン「……して、君の結論は？」

コルベール「あの青年は紛れもなく、あの「ガンダールブ」！それ以外に何があるのですか！？オーレド・オスマン！」

コルベールは禿げ上がった頭を、ハンカチで拭きながら激しい口調でオスマンにまくし立てた。

オスマン「ふむ……、確かに、この書とスケッチに書かれたルーンは同じじゃ。しかし、そのルーンが同じと言うただの平民である青

年が伝説の「ガンダールブ」になつた、といふ事になるんじやうつ  
な。」

「ゴルベール「どうしましょ?」  
オスマン「じゃが、それだけで彼が「ガンダールブ」と決め付ける  
のは早計かも知れぬ……。」

「ゴルベール「それもそうですね。」

オスマンはコツコツと人差し指で机を突いていた。そこにドアをノックする者がいた。

オスマン「誰じゃ。」

オスマンがドアを叩く者に問うと、ミス・ロングビルの声が聞こえてきた。

「ロングビル「わたしです。オールド・オスマン。」

オスマン「ミス・ロングビルか。どうしたのじゃ?」

「ロングビル「ヴェストリの広場で、決闘をしている生徒がいるよう  
で、大きな騒ぎになつています。騒ぎを止めるに入った教師がいまし  
たが生徒達に邪魔されてしまい止められない様です。」

「ロングビルの報告にオスマンは軽い頭痛が起きた様に頭を右手で軽く痛みを抑えるかの様に手を当てた。

オスマン「まったく、暇を持て余した貴族ほど、性質の悪い生き物  
はおらんな。して、報告にあつた暴れている者は一体、誰なんじや

？」

ロングビル「一人はギーシュ・ド・グラモン。」

オスマン「あの、グラモン家のバカ息子か…、父親の方は色の道では剛の者じゃったが、息子の方も輪をかけて女好きじや。大方、女の子の取り合ひじやる。相手は誰じや？」

オスマンの問いにロングビルは少し間を開けて話す。

ロングビル「……それが、相手はメイジではあります。ミス・ヴァリエールの召喚した使い魔の青年の様です。」

オスマンとゴルベールは顔を見合せた。

ロングビル「教師達は「眠りの鐘」の使用許可を申請しています。」

オスマンの瞳が鷹の様に鋭く光る。

オスマン「アホか。たかが子供の喧嘩、そんな事に学院の秘宝を使つてどうするのじや。放つておきなさい。」

ロングビル「わかりました。」

コッコッとミス・ロングビルが去っていく足音が聞こえた。

ゴルベール「オールド・オスマン…」

オスマン「わかつておる。」

そう言つてオスマンは壁に掛かつた大きな鏡に向けて杖を振つてギーシュとカイの決闘を見た。…………そして彼等は「遠見の鏡」で決闘の一部始終を見終え、コルベールは若干震えながらオスマンに話し掛ける。

コルベール「オールド・オスマン。」

オスマン「うむ。」

コルベール「…………あの平民の彼、勝つてしましましたね。」

オスマン「うむ。」

コルベール「ギーシュは一番低いドットメイジですが、ただの平民に後れをとる事は無いはずです。そして！あの動き！あんな平民見た事などありません！やはり彼は伝説の「ガンダールブ」なのです！」

オスマン「しかし、本当にそういうかな。」

コルベールの話しへ聞きながらもオスマンは未だに半信半疑であった。そこにコルベールは更に興奮気味でオスマンに話し掛けてくる。

コルベール「何故ですか！オールド・オスマン！？」

オスマン「確かにあの青年はメイジに勝つた。しかし「ガンダールブ」はあらゆる武器を使うと伝わつてあるが彼は武器を使わずに、我々の知らぬ魔法の様な物を使ってドットではあるがギーシュ君を退けておる。」

「コルベール」「確かにあの様な魔法は見た事などありません。」

オスマン「まだ、彼を「ガンダールブ」とするにはローンが同じと言つだけでは決め手にはならんじやろつ。」

コルベール「オールド・オスマン!」

オスマン「今度はなんじや? コルベール君。」

コルベールの叫ぶ声にオスマンは呆れた様な声色でコルベールの名を呼んだ。

コルベール「それが、ヴィリエ君が今ギーシュ君にいきなり風系統の魔法で攻撃したのですが、あの平民が手に持つた剣でその風を斬つた様なんです。」

オスマン「なんじやと!...」

コルベール「ヴィリエ君は確かラインメイジの筈です。如何にあの平民が強くても流石に不味いのでは……」

オスマン「しかし、ヴィリエ君には悪いがこれで彼がガンダールブかが確認出来るじゃろ。」

コルベール「そうですね。」

そう「コルベールとオスマンは「遠見の鏡」で再びカイをみた。

カイ『さて、貴様は何故、先程ギーシュに不意打ちをしたのだ?』

ヴィリエ「ふん！平民に負けた奴等いなくても良いだろ？」

ル「な！？」

ヴィリエの言葉にルイズやこの場にいる生徒達は絶句した。

カイ『その様な考えをする者は少なからず良い印象は持たれませんよ？』

ヴィリエ「貴様！平民風情が貴族である僕に意見なんてするんじゃない！！」

カイ『御託は良いからさつさと掛かってこい。』

ヴィリエ「平民如きが貴族に逆らうなどどうなるか教えてやるよー。」  
エア・ハンマー「…」

ヴィリエはそう叫びながら圧縮した風魔法を放つて来た。それをカイは何も構えずに立っていた。

ルイズ「ちょっと、カイ！なにをボサッとしてるのよー。？」

カイが動かない事にルイズは怒鳴つていた。

カイ『…トレース…オン！「同調、開始」』

カイは小さくそつそつと両手に黒と白の一本の対となる剣を投影した

カイ『甘い！…』

”斬”

カイは迫りくる見えない圧縮された風を斬り伏せる。その様子に、ヴィリエは叫ぶ

ヴィリエ「一体何なんだよ！貴様は！？」

カイ『やつ輩ばしつかりと名乗つて居なかつたな…』

ヴィリエ「平民がいい加減舐めるなよ！？俺は、ヴィリエ・ド・ロレンヌ！貴様に名乗るのもおこがましいがな！」

カイ『改めて、我が名は日本帝国軍所属黒逸戒准将！！推して参る！…』

全「「「「なつ！？！？」」「」」

カイの名乗りに、ヴィリエを始め、周りの生徒達は驚愕していた。

カイ『どうした。名乗りを聞いて臆したか？』

ヴィリエ「貴族である俺がそんな事になるか…！それに、貴様の名乗りに等驕されないぞ！ほら吹きが！」

カイ『な、そのほら吹きにやられると良い。』

ヴィリエ「舐めるなつ！－【ニア・スピア】－…』

カイの言葉に激昂したヴィリエはカイに向けて「ニア・スピア」を放つ。だが怒りに任せて放ったからか、カイにでは無くルイズにそ

の丞先が向けられた。

カイ『（不味い！）マスター！』

ルイズ「きやつ！」

”ズシャツ！！”

ルイズを庇つた瞬間、何かを貫く様な音とルイズの顔に温かい液体の様な物が少し降り掛かった。

ルイズ「な、何よ…これ。」

カイ『（不味いな、何故か解らんが「神の12の試練」が上手く発動していいみたいだな。）マスター……無事か？』

ルイズ「無事かつて、アンタの方が無事な状態じゃないわよ！？」

カイ『確かに…ゴフッ！胸に風穴を開けられてしまつているから…無事とは言い難いが。』

カイはルイズを突き飛ばした時に心臓の付近を「エア・スピア」により明らかに小さくは無い傷を受けられており、そこからはかなりの量の血を流しており、ルイズはそれを悲鳴に近い声を上げていた。

ヴィリエ「あ…、ああ…。」

カイのそんな状態を、ヴィリエは怯えた様子で見ていた。そしてカイは重傷にも関わらずに立ち上がり、ヴィリエの前に歩もうとしていた。

ルイズ「ちょっと…？そんな身体でビームに行く気よー…？」

カイ『何処について、まだ決着はついていないのですよ？』

ギーシュ「ルイズの言つ通り、これ以上は流石に危ないと僕も思つよ。』

ケティ「カイ様…ギーシュ様の仰る通りで、その様な身体で無茶ですわ！？』

カイ『ゴホッゴホッ…！それでも……ですよ。戦いとは命のやり取り、この様な事は何度もありましたから、心配無用です。そして何よりも、ヴィリエでしたっけ？あの様にプライドの塊の様な輩は一度そのプライドを完膚無きまでにへし折つてやらないとそれがどれだけちっぽけな物なのかが判らない者なんですよ？』

ルイズ達が止める様に言つがカイはそれを拒否し、決闘を続けると言つた。

ヴィリエ「フ、フン！平民が強がりやがつて…！今僕の最強の魔法で止めを刺してやるよ…！」

そう言つてヴィリエはルーンを唱え始めた。

カイ『……なら、此方も風でお相手しよう。』

ヴィリエ「そんな虚偽威し江东のものか…！」「ニア・カッター」

「…』

” フォン…！”

ルイズ「カイ！？逃げなさい！？」

ギーシュ「使い魔君！？」

ケティ「カイ様！」

ルイズ達が迫りくる風の刃に身構えもしないカイを見て悲鳴を上げるがカイはそれに構わないで自身も風の魔法を放つべく詠唱を始めていた。

カイ『ゝ風よ、我に逆らう敵を斬れ。＜「ウインド・カッター」！』

”ヒュヒュン！！”

ヴィリエの魔法に対してカイは同属性の物を放つがヴィリエが一つの風に対してカイは二つの風の刃を放っていた。

”バシュツ！！” “斬つ！！”

そして、両者の放った風魔法は、一つ目の風は相殺し、カイの放った風魔法の二つ目でヴィリエの持つ杖を真つ二つに斬った。

ヴィリエ「う、うわあ！？」

杖を斬られた事に、ヴィリエは驚きの余りに後ろに尻餅をついた。

カイ『さて、小僧…まだ…やる気か？』

尻餅をついた状態のヴィリエにカイは静かに近づき感情が何も感じないとても冷徹な声で問う。

ヴィリエ「あ、ああ…。参った……降参する。」

カイ『ふむ、ならばまず、貴様が不意打ちしたギーシュに謝り、次は傷つきやうになつた、我がマスターにも謝罪をしてもらおう。』

ヴィリエ「わ、分かつたよ。その、ギ、ギーシュ…』めんなさい…！」

ギーシュ「なにを気にする必要があるんだ？僕のケガはカイの物だけでヴィリエの物が無いのに謝る必要があるのかい？ルイズもそう思つだらう？」

ルイズ「そうね。わたしどしては逆に重傷を負わせたカイの方に謝つてほしいうらじよ。」

キュルケ「へー。アンタにしては珍しく良心的ね？何時ものアンタの性格なら使い魔の方にハツ当たりをしてそつなのになえ？」

ルイズ「なつ…？ツェルプスター！アンタ何時の間にいたのよ…！」

キュルケ「いつ、どこに居ようとわたしの勝手でしょ～？」

ルイズ「何ですってえーーー！」

カイに先を施されてヴィリエはルイズ達に謝るがギーシュは許すも何もと言つた感じでルイズはカイを心配した発言をし、何処からい

たのか判らないがキュルケにおちょくられていた。

カイ『良い友人達を持っているじゃないか。』

ヴィリエ「は、はい！」

カイの言葉にヴィリエは泣きながら答えた。

ルイズ「はつ！？ そうだわ！ カイツ！？ 傷は大丈夫なの！？」

カイ『大丈夫ですよ？ 既に魔力を傷口に回したので出血は止まっていますし直に完治しますよ。』

ルイズ「まったくー！」主人様をヒヤヒヤさせて、心配したんだからね！？」

カイ『マスターが心配してくださるとは…… 光栄の極みです。』

ルイズ「べ、別にアンタがじゃないわよ！？ アンタがいなきゃ誰がわたしの使い魔をやるのよ！？」

カイ『そうでしたね。 …… つと』

ルイズとたわいもない話をしていたカイだが急にフラついた様子で膝を地に着けた。

ルイズ「ちょっと、ちょっと！？ どうしたのよ！？」

カイ『マスター、すい… ません。少々… 血を流し過ぎたみたいです。

ルイズ「あれだけ無茶をしたんだから当然よー!？」

カイ『すいません。少し休めばいいつ…も通り…マ…スターのお側に  
…………』

ルイズ「ちょっとー? カイ!…返事をしなさいよー!?

キュルケ「落ち着きなさいよ! ただ寝ているだけよ。」

カイは意識が朦朧とした状態でルイズと会話をしていたが途中で意識を手放してしまい、ルイズは焦り、倒れたカイを揺さぶるが隣にいたキュルケにより止められた。

ルイズ「まつたく、世話の掛かる使い魔ね！」

ルイズはそう言つてカイを抱いだくするが身長差がありすぎて引かずる様にしかなつていなかつた。

キュルケ「まつたく、ルイズ? 待ちなさいよ。」

そう言つてキュルケは自分の杖を取り出し、カイに「レビテーシヨン」のルーンを唱えて浮かせるのであった。

ルイズ「…ありがとう。シエルプストー。」

キュルケ「驚いたわ! あのルイズが素直にお礼を言つなんて……明日は槍でも降るんじゃないかしら?」

ルイズ「何ですって、シエルプストー! ……こっちが素直に感謝をし

たのに何よーーその態度はー!?

キュルケ「あら、『めんなれ』。」

ギーシュ「2人共? とつあえず早くその使い魔君を休ませてはどつかな?」

ルイズ「そ、そうよーー! まつたく、シールプストーを相手にしてる場合じゃないわよーー!」

そう言つてルイズは「レビューション」で浮いているカイを押しながら寮のある方向に歩いていった。そんな一部始終を「遠見の鏡」で見ていたオスマンとコルベールは互いに溜め息混じりな声色で話をするのであった。

コルベール「…あの平民、一人目にも勝つてしまいましたね。オールド・オスマン。」

オスマン「うむ。」

コルベール「直前の事は戴けませんでしたが、ヴィリエ君はラインメイジ、ギーシュ君と比べると確かに優秀なメイジですがプライドが高すぎると言つ悪い点もあります。が、ただの平民にああも簡単に倒されるなんてまず有りません。」

オスマン「うむ。」

コルベール「これらの結果を見ればあの平民はやはりあの「ガングダールブ」で間違いありません!…」

オスマン「う~む。」

コルベール「早速この事を王室に報告して指示を仰がないと...。」

オスマン「それには及ばん。」

オスマンは重々しく頷いた。そして彼の蓄えた白い髭が揺れる。

コルベール「何故ですか!? 現代に再び現れた「ガンダールブ」!  
! これは世紀の大発見ですよ! オールド・オスマン! ?」

オスマン「ミスター・コルベール。「ガンダールブ」はただの使い魔  
ではない。」

コルベール「その通りです。始祖ブリミルが用いたガンダールブ。  
姿形は記述されていませんが、主人の呪文詠唱の時間を守る事に特  
化した存在だとされています。」

オスマン「左様、始祖ブリミルの呪文は強力じや、じやがそれ故に  
詠唱がとても長い。知つての通り詠唱中のメイジは無防備じや。そ  
れを守る為に用いたのがガンダールブ。その強さは...」

オスマンの言葉をコルベールが興奮氣味に引き継いだ。

コルベール「一人で千人の軍を殲滅する程の強さ、さらに並のメイ  
ジでは全く歯が立たないと。」

オスマン「それで、ミスター・コルベール。」

コルベール「はい。」

オスマン「その平民の青年は本当にただの平民だったのか？」

コルベール「ミス・ヴァリエールが召喚した際に見た時は見慣れない服を着ており軍人に近い雰囲気を持っておりました。そして、ディクト・マジックをかけましたが軍人の雰囲気は有りましたが普通の平民でした。」

オスマン「その青年をガンドールブにした生徒は、一体誰なんじゃね？」

コルベール「ミス・ヴァリエールですが……。」

オスマン「彼女は優秀な生徒だったのかね？」

コルベール「優秀と言つたり、寧ろ無能だったかと……」

オスマン「その二つが謎じやな。」

コルベール「そうですね。」

オスマン「無能なメイジと契約しただけで青年がガンドールブになつた理由が判らん。まったくの謎じや。」

コルベール「そうですね。」

オスマン「王室のバカどもにガンドールブと主人を渡す訳にはいかん。そんなもんを渡したりしたらそれを理由にしてまた戦を始めかねん。宫廷で暇を持て余している連中は戦が好きじやからな。そんな、くだらん事にあの青年は巻き込みたくない。」

「コルベール」「はあ。学院長の深謀には恐れ入ります。」

オスマン「この件は儂が預かる。ミスター・コルベール、他言無用じやぞ?」

「コルベール」「は、はい! かしこまりました!」

オスマン「それにしても、ガンダールブとは一体どの様な姿をしつたのじゃろうな。」

コルベールは夢を見る様に呟いた。

「コルベール」「あらゆる武器を使い、敵と対峙したのですから……。」

オスマン「うむ。」

「コルベール」「とりあえず、腕と足はあつたんでしょうね。」

その後はなんともまとまらない話をしていたのであった。

決闘の騒ぎのその夜、ルイズは自分の部屋にあるベッドで寝ているカイを心配そうに見ていた。

ルイズ「カイは大丈夫かしら。」

シエスタ「大丈夫ですよ。ミス・ヴァリエール。」

ルイズ「そうは言つても……」

シェスター「使い魔さんは寝るだけと言っていたのですからその言葉を信じて待つてあげればよろしいと思しますよ？」

ルイズ「…そうね。起きたら文句を言つてやるんだからね。」

シェスター「ミス・ヴァリエールもお休みになられてはビリですか？」

ルイズ「ええ、そうするわ。貴女も夜遅くまでありがとうございましたがとね。」

シェスター「いえ、元々、わたしの不注意で招いてしまい、使い魔さんに迷惑を掛けてしまいましたから。」

ルイズ「コイツの事だから、そんな事は関係無いって言つでしょうね。まったく…。」

シェスター「ふふ、そうかも知れませんね。それでは、ミス・ヴァリエール。お休みなさいませ。」

ルイズ「ええ、お休み。」

ルイズと話をしていたシェスターはそう言って部屋を退室していった。

ルイズ「まったく、心配を掛けたのだから、明日にはしっかりとそこら辺の事を話してやるんだから…ね。」

そう言ってルイズも眠りに落ちていった。

## 第四話（後書き）

所々にオリジナルを入れましたので何か付け足した方が良いやアドバイスをもらえると助かります。

## 第五話（前書き）

今年初めての投稿のクロイツヴァルトです。今回の話では自分でもかなり無茶な話になってしまっています。

次の日の朝方。カイはいつも通りに日を覚ました。

カイ『（何故、俺はベッドで寝ているのだ？）ルイズは…、』

シエスタ「日が覚めましたか？」

ベッドに寝ている事を不思議に思いながら、部屋の周りを見ようとしたら、ちょうど部屋にパンと水が乗っている盆を持つて入ってきたシエスタに声をかけられた。

カイ『シエスタ？私はどの位、寝ていたんだ？』

シエスタ「カイさんは決闘の日から2日間寝ていましたよ？」

カイ『大体、3日位か。（原作通りと言つが、世界の修正力とは恐いものだな。）シエスタが私の看病を？』

シエスタ「いえ、わたしではなく、そこにいるミス・ヴァリエールが寝ずにカイさんの包帯の取り替えやお顔や体の汗拭いていましたよ？」

カイ『マスターが？』

シエスタの言葉を聞き、ルイズを探すと机の上で突っ伏して柔らかい寝息を立てて寝ているのを見つけた。良く見ると愛らしい顔の瞼の下に隈を作っているのが見えた。

カイ『隈を作るまで俺の看病をしてくれていたのか。（俺の油断が

招いた事だが鍛錬の見直しが必要か……。』

思案しているとルイズが欠伸をしながら目を覚ました。

ルイズ「ふああああ～。」

カイ『マスター、お早う御座います。』

ルイズ「あつ！カイ、起きたの？」

カイ『はい。この度はご迷惑をお掛けしてすいませんでした。』

ルイズ「そんな事はいいわ。あれはわたしが不注意だったからあんたが謝る事じゃないわよ。」

カイ『しかし……』

ルイズ「反論は無しよ…」

シエスタ「う、じゅつくり。」

ルイズの様子を見てシエスタは苦笑しながら退室していった。

ルイズ「とりあえず、傷の方は大丈夫なの？」

カイ『心配しているのですか？』

ルイズ「そ、そんな事ないわよ！ただ、アンタが治つてない状態だと倒れられても困るだけだからよー」

カイ「そうか。」

ルイズ「で、どうなの？」

カイ『無論、大丈夫だ。』

ルイズ「そりゃ、なら、いいわ。」

カイ『こつまでもマスターのベッドを使ひ覗にはいかないな。』

セツナ「ベッドから出て腹部の包帯を取り服を着る。

ルイズ「ふん、当たり前よ！ 貴族のベッドは普通は平民のアソタは寝れないんだからね！」

カイ『では、マスターはゆっくり休んでくれ。私は少し外に出てくるからな…。』

ルイズ「何よそれ、ビニに行くか詳しく教えなさいよ。」

カイ『少々、ヴェストリの広場に…。』

ルイズ「何のためによ？」

カイ『鍛錬の為と平民から脱する為とだけ言っておこう。』

ルイズ「訳わかんないわよ！ いいわ！ わたしもついて行くわよ…。」

カイ『しかし、マスターよ。君は寝不足ではないのか？』

ルイズ「そんな事、アンタの用事が終わってから寝れば良いのよ。」

？

カイ『ふつ、了解した。ならば早く済ませるとしよう。そこで盗み聞きしてゐる人はどうするのかね?』

キュルケ「あら? バレてたの? ?」

タバサ「アナタの事に興味がある.....。」

ルイズ「ツェルプスター? なんで、アンタが此処にいるのよ! -! キュルケ「あら、ルイズとダーリンだけでビニに行くか気になるじゃない?」

タバサ「わたしはあの使い魔が気になつただけ...。」

キュルケ達がいる事にルイズは驚愕し質問するがさも当然の様に答える「人にルイズは更に激昂する。

カイ『行くのか? 行くなら早くしてもらえるか? 他の者達が起きてくれる? 些か面倒なんでな...。』

そう言つてカイは部屋を出て行つた。

ルイズ「ちょっとー? 待ちなさいよーー!」

キュルケ「もう、待つてよ。ダーリン。」

タバサ「.....。」

そして、一行はヴェストリの広場に着くとカイがルイズ達には判らない方陣を広場の中央に描いていた。

ルイズ「何をしてるのよ？」

カイ『マスターよ、悪いのだが少し、静かにしてもらえるか？』

ルイズ「なんでモガモガ！？」

キュルケ「ルイズ少しは静かにしたらどう？」

騒ぎだしそうなルイズをキュルケが手で口を抑えながら抱える  
タバサ「…何か召喚するの？」

カイ『ほう。タバサ嬢は感が良いな。まあ召喚はあつてingがこの  
世界とは全く違う魔法だがな。』

そう言ってカイは方陣を触りながら呪文を唱える。

カイ『素に銀と鉄

「Das material ist und Eisen.」

礎に石と契約の大公

「Der Grunestonirt aus Stein  
und der Gross horzog des Vertr  
dag.」祖には我が大師シユバインオーグ

「Der Ahn ist meiner groesser M  
eister Schweinorg.」

降り立つ風には壁を

「Schutz gegen einen hcf tigere W

カイが呪文を唱え始めた途端、方陣が輝きだした。

「ルイズ、何が始まったのよ!?」

キルケ「判らないわよ！？」タバサは判る？」

タバサ「彼はわたし達が知らない召喚魔法を使うみたい。」

——人——召喚！？！？

ルイスー使い魔が使い魔を呼ぶ事が出来るの！？」

「ターリンの様子を見る限りかなり凄  
たた  
キルケー判らんしね。」

3人が話している間にもカイは召喚の儀式を続けていた。四方の門を閉じ王冠より出で

e  
r  
K  
r  
o  
n  
e  
:

「云々」は「現」の「跡」である。

閉じよ閉じよ閉じよ閉じよ閉じよ

卷之三

繰り返すつどに五度ただ満たされる刻を破却する

Nur ist es die volle Zeit gebraucht.  
Es wird fußmädeln werden.  
Sie wird erholt.

o c h e n .

- - - A n f a n g

告げる

「 - - - S a t z .」

「告げる」とカイが言った瞬間、方陣の光が強くなる。汝の身は我が下に我が運命は汝の剣に

「D u „ u „ d e r l s s t a l l e s m i r , M e i n S  
c h i c k s a l „ u „ d e r l a „ s s t A l l e s d e i  
n e m S c h w e r t .」

詠唱が終わった瞬間、方陣を中心に眩い光が辺りに充満する。

ルイズ「何も見えないじゃない！！」

タバサ「……何かいる。」

タバサは光で見えないにも関わらずその先に何かいる事に感づいた。

？？？「貴方がわたし達を召喚したのですか？」

？？？「サーヴァントの複数召喚等聞いたことがありますん！」

？？？「いんじやねえの？来ちまつたもんはしかたねえだろうが。」

カイ『様子からしてライダーにセイバー、そして、ランサーって所か？』

ライダー「はい。私のクラス名はライダーになります。」

セイバー「私のクラス名はセイバーです。」

ランサー「んで、俺がランサーだ。にしても、兄ちゃんはすげえな  
一回で俺達のクラス名を全部覚えるなんてよ~。」

カイ『サーヴァントが三人か…。成果は上々と言つか、予想以上だ  
な。』

セイバー「それで、貴殿が我々を召喚した、と言つ事で間違いあり  
ませんね？」

カイ『ああ、間違い無いよ。』の両腕と右の甲にある、令呪が証拠  
だ。』

ライダー「確かに。わたし達の令呪の様ですね。」

ランサー「で、俺達を呼び出したって事は聖杯戦争に参加するつて  
事か？」

カイ『戦争には参加しない。』

セイバー「何故！？」

ランサー「じゃあ、なにか？てめえは戦争をしねえのに俺らを呼ん  
だのか？」

カイの言葉にセイバーは驚愕し、ランサーは若干ではあるが濃い殺  
氣をカイに向けていた。

カイ『早まるなよ…。クー・フーリン。』

ランサー「テメエ、何故我が真名を知つてゐる！！」

カイ『貴様の真名だけでは無い。騎士王にメテユーサも知つてゐる。

』

二人「なつ……！」

ランサー「得体の知れねえマスターだな。」

ライダー「わたし達を呼んだ理由は一体なんですか？」

カイ『理由は2つ。1つ目は自身の鍛え直しの為。2つ目の方は俺  
がいない時の我がマスターの警護だ。2つ目の方を最優先に行つて  
くれ。』

ランサー「英靈を相手に自身の鍛え直しをしたいとは随分な自信だ  
な。」

キュルケ「ちょっと、ちょっと…わたし達を置いて話を進めないで  
くれるかしら？」

ライダー「貴女達は？」

ルイズ「わたしはルイズ。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン。  
ド・ラ・ヴァリエール。アンタ達を召喚したアイツの主人よ。」

キュルケ「私はキュルケ。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フ  
ォン・アンハルツ・ツェルプスト。火のトライアングルメイジで  
2つ名は「微熱」よ。よろしくね？」

タバサ「…タバサ。」

セイバー「はあ。」

キュルケ「あはは、ごめんなさいね?この子、口数が少ないから。この子はタバサ。風のトライアングルメイジで2つ名は「雪風」よ。」

タバサ「…」

ライダー「そ、そうですか。（表情が全く読めません）」

ランサー「で、俺達は呼び出したは良いがどこに寝るんだ?」

ルイズ「はつ…?そ、そつよーアンタ含めて四人もわたしの部屋は広くないわよ…!」

カイ「とりあえず、ルイズの部屋にはライダーが居てくれ。非常時の時には宝具を使用してくれてもいい。」

セイバー「我々は?」

カイ「セイバーとランサーは、ちよつと待つて。」

そう言つて扉を閉じてカイは自身の能力を使い、森の奥にコテージを創り出した。

ランサー「ひゅ~ すげえじゃん。」

セイバー「あれが貴方の能力ですか？」

カイ『まあ、その一部みたいな物だな。他にもあるがまた今度だな。

』

ルイズ「アンタってほんとに何者よ！？こんな物作れるなんて聞いてないわよ！？」

カイ『聞かれていなかつたからな。まあ、良い。私の事を説明する前にコテージに入つてからしよう。』

セイバー「この場では無理なのですか？」

カイ『長くなるからな。』

タバサ「…早く行く。」

タバサはカイの服を引っ張りながら急かしていた。

ルイズ「ちょっと、待ちなさいよ！…！」

セイバー「我々も行きましょう。」

ランサー「だな。とりあえず、行くしかないしな。」

ライダー「そうですね。」

キュルケ「もう何がなんだか、理解が追いつかないわね！」

先に行つたカイ達を追い掛ける形でキュルケ達はコテージに向かつ

た。

## 第五話（後書き）

サーヴァント三人の召喚をしてしまった主人公のカイでした。この後はコテージにてカイがMuuv-Luvにいた時の過去話になります。

カイ『三人は無理があるんじゃね？』

作者「俺があの3人が好きでお前が召喚するなら少し無茶をしてでもだしたかったんだよ！？」

カイ『少しば自重しろよ！…』

作者「だが！断る！…」

カイ『死ね！！刺し穿つ死刺の槍「ゲイ・ボルグ」！…！…』

作者「万難非す楯「アイギス」！…」

カイ『防ぐな！…』

作者「防がんと死ぬわ！…」

カイ『こんな駄目作者ですが読者の皆様、ユーザーの方々これからもよろしくお願いします。』

作者「俺の台詞取られた！…」

## 第六話（前書き）

過去話になる筈がサーヴァント組との模擬戦になってしましました  
グダグダな気がしますが叩かないで下さい m(\_ \_)m

「テージ内

ランサー「以外に広く出来てんだな」。」

セイバー「外見からはそつは見えなかつたですね?」

戒『空間操作の魔法を応用して作つてゐるから見たよりかは広くなつてゐるぞ? それに俺が設定したのだから当たり前だろ? そして、外見上は一階建てだが、実際には地下に広がる様に出来ていて俺の工房も一緒に作つてあるし、訓練場もある。生活面ではキッチンもあれば食材も豊富にある、そして地下で栽培も出来るから街に行つて一々買いに行く必要も無い。今後の予定ではあるが状況に応じた地下施設を増築する予定も立ててゐる。』

ライダー「施設としては充分過ぎますね」

ルイズ「それで、何処で話をするのよ?」

戒『なら、地下に行くか。彼処ならば広いからな…。じつちだ。』

戒の先導の下に一同は奥の部屋に入る。すると部屋の中央に何かの魔法陣が描かれていた。

ライダー「転移の陣…ですか?しかし、人の身で失われた技術をどのようにして覚えたのですか?」

戒『それはまた今度な?今はこの世界の前にいた俺の過去を話す。それに、転移の陣と言うが、俺の描いたコレは正式には移送方陣と呼び、コイツで地下まで降りるから階の設定もするから俺の後に入

つて来てくれ。〔起動〕』

そう言つて戒は陣の中心に立ちキーを紡ぐと陣の文字列が光り、戒は光に分解されて消えた。

セイバー「わたし達も行きましょう。」

ランサー「今回のマスターは面白い奴だな 知らねえ術があるし退屈せずに済みそうだな」

ライダー「貴方はそれしか無いのですか?」

タバサ「……」

サーヴァント組とタバサはさつさと転移陣の上に乗り、戒と同じ様に消える。

キュルケ「ほら、ルイズ行くわよ?」

ルイズ「わ、判つてるわよ! そんなに急かさないでよ!」

そしてルイズと急かしてくるキュルケも同様に陣に入つた。そして、他と変わらずに光となり消える。

コテージ内地下20階

戒『よし、全員来たな…。』

戒とルイズ達がいるのは先程のコテージから1?程深い場所で灯りには赤い宝石の様な物が周りの壁と天井には一際大きい物が埋め込

まれる様にして辺りに配置されていた。そして、広さとしては城の大広間と同じ位か若しくは少し下位の広さがありその中心では丸いテーブルを囲む様にして戒達が座っていた。そしてそのテーブルの床下と卓上には先程の部屋と同様に魔法陣が描かれていた。

戒『さて、全員揃つた事だし、まずはサーヴァント組には先程の聖杯戦争の不参加の説明した方が良いな…。』

ランサー「そうだな…。確かに不参加の人物が何故俺達を召喚したのか聞きてえ所だつたからな?」

セイバー「そうですね。確かに我々は聖杯戦争に参加する為に呼び出され、戦う筈でしたから、ちゃんと説明して頂かなければ納得がいきませんから。」

戒『だらうな…。まず、ランサー達がいるこの世界は冬木市でもなければ地球でもない。まったくの別世界で所謂異世界「パラレル・ワールド」と呼べる場所で勿論の事ではあるが、聖杯自体存在しない。』

サーヴァント組「聖杯が存在しない!?」

戒の一言にセイバー達は驚愕の声を上げる。

セイバー「で、では何故我々を召喚出来、尚且つ現界出来ているのですか!?我々英靈の召喚と現界は聖杯があつて初めて起こせる奇跡なのですよ!?」

戒『落ち着けって。一つずつ説明するから、まずは何故聖杯が存在しないのに召喚が出来たのは俺の魔力を呼び水にしてセイバー達の

世界の魔法陣の知識とキーを知つていて尚且つ、喚ぶための依り代を全てを所持していたからだ。で、2つ目の現界についてだが厳密には違つて半受肉化と言つ状態でこの世界に喚んだんだ。』

ランサー「半受肉化…？んな言葉は聞いた事ねえぞ？」

戒『それはそうだろ？呪喚する際の陣に俺がこの世界から消えるか死ぬかするまでは常に現界出来る様にしてあるし、半受肉化だから姿を隠す為の靈体化も出来るから心配しなくても大丈夫だぞ？』

ライダー「呪喚の陣にそんな事をして良くなわたし達を正確に呼び出せましたね」

戒『そりゃあ、俺がライダー達と同じ様に宝具を持っているし、ゲイボルグやエクスカリバー等を持つていてる訳だからライダー達を呪出来て当たり前だ。』

ランサー「俺達と同じ宝具を持っているだと？」

セイバー「俄に信じられませんね。」

戒『まあ、そうだろうな…。』

戒の言葉にランサーとセイバーは先程までとは雰囲気がガラリと変わり、濃厚な殺氣を戒に当てるが戒は顔色一つ変えず、普通に返す。

ライダー「英靈の殺氣を受けて良くな普段でいらっしゃますね？」

戒『この位では前の世界では別段不思議な事でも無いよ…。』

セイバー「戒、先程の言葉の真偽を確かめて置きたいのですが宜しいでしょうか？」

戒『そうだな…。なりこの下に丁度良い広さの部屋があるから其処で模擬戦をするか…。』〔開錠〕』

戒は席を立ち、自分の後ろの壁に手を当てて、移送方陣と同じ様に呪文を唱えると当てていた壁が開き、人が一人余裕で通れる入り口と下の階に繋がる階段が姿を現した。

ライダー「自分の家に隠し扉…ですか」

戒『ちょっとした遊び心だ…。さっさと行くぞ?マスター達はどうする?私達の模擬戦を見に来るか?』

ルイズ「当たり前じゃない。使い魔の戦い方を把握しどぐの主人様の仕事よ。」

キュルケ「勿論よ ルイズとは違うけどダーリンの戦う姿を見てみたいしね~」

タバサ「参考」

戒『そうか、ああ、そうだ、セイバーとランサー、それにライダーもだが真名の解放をしても大丈夫だからな?周りの壁は硬度で言えばダイヤモンド以上で固定化の魔術を使ってあるから派手に暴れてもまず壊れる事は無いさ。』

戒は入り口に入る前に後ろにいるセイバー達に言うと戦闘狂と予備軍の2人は目を光らせ、対象外のライダーはただその内容に呆れ、

壁の強度を聞いたゼロ魔組は驚愕の目で壁を見ていたがタバサだけは「ティテクト・マジック」で見ていたのかあまり驚きはしていかつた。

## 地下21階 第1訓練場

戒『マスター達は入り口横にあるその陣の描いてある席から見ていてくれ、対物理障壁「アンチ・マテリアル」に対魔法障壁の複合型の方陣だ。それと遠くからでも見える様に遠見の魔術も併用してある俺特製の物だから俺以上の魔力を持った奴がいない限り安全だし、障壁を破壊する程の術は使わないから安心して其処から観戦してくれ。』

キュルケ「ダーリンってば色々な事に精通しているのね」 益々惚れちゃうわね』

タバサ「後で教えて」

戒『時間があれば教えるさ。。。』

ランサー「おい、おつ始めたならさつと殺しちゃうぞ」

ライダー「まず最初に誰とやるのですか...?」

戒『ん?何を言っているんだ?時間が勿体無いから3人纏めて相手をするぞ?』

ライダー「はい?」

セイバー「サーヴァントの中で三騎士と謳われる我々を纏めて相手

ランサー「確かに時間の短縮にもなるが、お前さんのそれは自信と言つよりも過信と言つた方が良いかも知れねえな…。自信過剰は戦場では命取りだぞ?」

戒『ふむ…。ならば言い方を変えよ!…別にセイバー達を馬鹿にしている訳でも無く、慢心している訳では無い、ただ、この位の事をしなければ俺の実力が判らないと思つただけだ…。』

セイバー「なら、簡単にはやられないで下さこよ?」

戒『判つている。それとこの訓練場はあらゆる環境下での訓練が出来る様に魔法で作り上げる事が出来る。先ずは森林での戦闘で設定しておcka。モニター展開、フィールド設定…森林、風速は通常、地面は泥濘を少々…と。これで良いかな?』

戒が自分の目の前の空間にモニターを展開し状況設定をしモニターを閉じると同時に訓練場内に魔力が急増しその場に光が満ちた。そして、その光が収束するとそこは辺り一面が木々で生い茂った所に変わっていた。

ライダー「此処ではその様な事も出来るのですね。」

戒『これだけじゃないぞ?模擬戦用のダミーを出す事も出来るし、予め自身の動きをトレースさせて置けば自分自身との戦いも出来る様になつていてるから自身の戦闘フォームの見直しや弱点の克服が可能となつていてるし、自身のゴーストのレベルを上げる事で自身が思いつかない様な動きもしてくれるから参考にもなるから利便性の高い施設となつていてる。』

ランサー「そりやすげえな 今の状態から上を田指せりて  
事は良いじゃねえか」

セイバー「確かに己自身と戦える機会は無いですからね。」

戒『それじゃあ説明も終わつた事だし…始めるぞ…』

戒の言葉を皮切りにセイバー達は先手必勝と言わんばかりに一気に詰め寄るが戒は足下の地面を吹き飛ばし、その際に生じた砂煙に乗じて、その場から離れる。

セイバー「くつ…田眩ましとは卑怯ですよ…」

ランサー「今のは戦士としては良い判断だと思つぜ?・多人数を相手にする場合には先ずは距離を離して相手をばらけさせて各個撃破が定石だが、俺達にそれをやるだけの胆力があるのは讃めていいかも知れねえな」

戒の行動にセイバーは非難の言葉を上げるが、逆にランサーは賞賛をする。そして戒は少し離れた場所で木の上に気配を断ち乗ついた。

ライダー「此処で言い争ついても仕方ないでしょ?・先ずは戒を見つけるのが先決ですよ?」

ランサー「だな。」

セイバー「ですが何処にいるので…」

セイバーの言葉を遮るかの様に木々の間から幾筋の光条が矢の様にセイバー達に襲いかかるが直ぐにそれを察知してそれを回避する。地面や木に着弾した光条は其処を起点にするかの様に周りを凍らす。

ライダー「！いきなりですか！？」

ランサー「はつ！様子見にしちゃあ派手な攻撃だな！」

セイバー「氷結系の魔術ですか！対魔力値が高いとは言え、食いつてしまえば暫くは身動きが取れない物のようですね。」

ライダー「厄介ですね。此方の居場所はバレていてあちいらの居場所は判らず…ですか。」

ランサー「悪手になるが散開して探して見つけた奴が派手な行動で場所を教えるって事で良いだろうな。」

セイバー「確かにソレしか無いですね…。」

ライダー「では、また後で。」

ランサー「誰が先に見つけるか勝負でもするか？」

セイバー「模擬戦だからと言つてもふざけないで下さい…。」

ランサー「セイバーは堅いな 勝負は楽しまないとだろ。」

セイバー達は軽口や叱責しながらその場をバラバラに散開した。

戒『ふむ…。やはり散開したか…なら此方もそれなりの準備をして置くか…「煉獄黒鎌」シャドウ・「魔黒外装」ブルート…』

戒は肩に手を当て、そのまま引き抜くとその手には漆黒の鎌が握られ、次の瞬間地面の下から禍々しいまでの黒と紫が混じる障気の様な物が吹き出し、周りを腐食させる。その障気が徐々に戒の体に沿うよう形を成すと鎧の様な物になり、体に纏うその鎧は黒色で統一され、さながら死神の様な容姿になっていた。

戒『精靈の武装化は初めてだが理論的には可能だつたが拒絶反応はとりあえずは無し…か。』

ライダー「やつと見つけましたよ。」

戒が一人で現在の自分を分析しているとライダーが先程の障気に反応し、戒を見つけた。

戒『1番手はライダー…か。』

ライダー「先程までは姿が違いますね？（あの鎧と鎌から高い魔力を感じますが一体どう言う事ですか？アレ等の正体や能力が判らないだけに不気味ですね。）」

ライダーは相対する戒に両腕を交差させる様に地に手を着き獸の様な体制で構える

戒『ぶつつけ本番の新術だ。失敗をしないかヒヤヒヤしたが成功したし、適合率も申し分ないがまだまだ改良点のある物だな？物質化するのにまだ時間が掛かるから改善策としては時間短縮化が課題だ

な…。』

ライダー「確かに強力な物と判りますが、その様な大きな得物は狭い場所ではあまり振り回せないと見ますが?」

戒『コイツを受けて見ればそれが判るぞ!』

ライダー「なつ!…?」

ライダーが驚愕するのも無理は無い。何故なら戒が振るつた鎌の刃が木の幹に当たる瞬間にまるで実体がそこに無いかのようにすり抜ける様を見れば物質と言つ物は隔たりがあればぶつかると言つ常識がそれには無いからである。しかし、そこはやはり英靈としてかくぐ様、冷静さを取り戻して迫り来る刃を後退して回避する。

ライダー「今のは一体…」

戒『どうした?ライダー…俺は普通に鎌を振つただけだぞ?そら!…まだまだ逝くぞ!』

ライダー「くつ!」

戒は唐竹割り、袈裟切りや逆袈裟に廻払い等と普通に刀を振る要領で自身の持つ鎌を振り回し当然の如く木や地面をすり抜けてライダーにその刃を閃かせる。

ライダー「あの得物の大きさで振り抜く速さにわたしがやつと反応が出来るとは最早反則ですね（しかし、ぶつかる物にぶつからずにすり抜けてくるあの奇抜とも取れる斬撃は常人は反応する前に首や胴体が2つに断たれてしまうでしょうし、わたしとしても厄介極

まりない物ですね……。)』

戒『どうしたライダー！お前の力を見せてみろ！』

ライダー「くつ…これ以上は好きにさせません！」

ライダーは戒目掛けて鎖付きの杭の様な短剣を投げるそれを戒は体を反らして避けるがライダーはその隙に距離を一気に離し、両目を隠していた眼帯を外し自身の象徴たる石化の魔眼を解放する。対魔力を持たない人間であれば瞬く間に物言わぬ石へと変えられ、持つ者は若干動きづらくなってしまう。そして、その魔眼、キュベレイの能力を最大まで発揮する為にライダーはその名を叫ぶ。

ライダー「〔自己封印・暗黒神殿〕ブレーカー・ゴルゴーン！！！」

「！」

戒『残念だが、俺には効かな…うお？』

戒はライダーの露出させた瞳を見ても自身の持つ対魔力でほぼ意味が無い事を証明する。しかし、ライダーが魔力を放出させた事によりランサーとセイバーを呼び寄せる結果となり、戒は少しだが後退せざるしかなかった。

ランサー「ちつ！外したか…しかしま～、ライダーが先に見つけてたかよ。」

セイバー「貴方はまだそれを言つていたのですか…。」

戒『やれやれ　お前達は言い争いをする為に集まつたのか』

セイバー「違うに決まつてます?」

戒『なら、そろそろ再開としようつか…。』

ライダー「2人共氣を付けて下さい。戒の持つあの鎌はどう説か周りの障害物をすり抜けて来ます。速さもかなりの物で音速に近い速度で振るわれます。」

ランサー「その仕掛けのタネあの鎌にあるつて所だろ? アレからは何かはわからねえが高位の存在の様な物を感じるぜ?」

セイバー「高位の存在…ですか?」

戒『正解だ。流石は魔術にも学があるクー・フーリンと言つ所だらうな…? コイツは別世界に存在する精靈を武器化した物でな? 閻の精靈の一体でなまじシャドウと言つ。』

ランサー「閻…か。なら、実体をすり抜ける芸当も頷けるな…。しかしよお? んな簡単に教えて良い物なのか?」

戒『タネが判つた所でそう簡単に攻略出来る物では無いからな…。』

戒はそつとランサーに向ひて鎌を振るつ。

”ギーン!—!—!”

ランサー「はつー・マジですり抜けて来やがるな」

戒の振るつた鎌をランサーは笑いながら防いだ。そこに……

セイバー「ランサー、加勢します！」

ライダー「一人では手に余ります！連携して倒しましょう。」

戒『3人同時…か？良いだろ？少しは本氣を出すか。「魔法の射手連弾闇の100矢」！』

ランサー「本氣とか言って、その程度か！」

ランサーは避けずに槍で弾きながら、叫ぶ。

セイバー「わたし達がいる事を忘れてもらひてはこまります……！」

ライダー「その通りです……！」

戒がランサーを相手にして魔法を撃つた時に背後からはライダーが真横からはセイバーが斬り掛かってくる。

戒『忘れてなどいないわ！！不意を突くのならば最後まで気配を断て……』

ライダー「そんなつ……？」

セイバー「なつ……？」

戒は背後から襲つて来たライダーの腕を難なく掴み取り、セイバーに向けて投げた。2人はまさか投げて来るとは思わず間抜けな声を上げて仲良く倒れてしまった。

戒『2人には悪いが退場していく貰おつか…来たれ、虚空の雷、薙ぎ払え「雷の斧」！…』

戒が倒れた2人に雷撃魔法を放つ、そして……

2人「キューーーー！」

戒の雷撃を喰らい、2人は外傷は無いが目を回して氣絶していた。

戒『2人はもう少しやると思つたのだがな……。まあ、対魔力が高くとも暫くは動けないだろうな……。』

ランサー「ちと厳しいじゃねえのか？お前さんのあの動きは誰から見ても驚くぜ？背後にある奴の腕を見もしないで掴んで真横にいる方に向けてぶん投げるなんて事はよ。最後のアレも苛めみたいな物だぜ？」

戒『最後はランサー…お前か。』

ランサー「はっ！鎌で俺の槍を受け切れるかな！…」

ランサーはそう言つて朱槍を用いた薙ぐ、打ち付け、槍のリーチを活かした蹴り等の連撃を浴びせる。が戒はそれを鎌の柄の方で全て受け流した。

ランサー「やるじゃねえか！…なりばこれでどうだーーーー！」

ランサーは再び槍の攻撃をするが、今度は皿ぐ等の線の攻撃では無

く、白漫の神速を活かした突きを無数に放つ。

戒『おおー？やはり速いなー。』

ランサー「そいつなら大人しく食らえよー。」

戒『それは断る…環刃乱絶爪…！』

戒はランサーの乱れ突きの全てを石突きの部分で受け止め、弾いた勢いを殺さずに刃を地面に突き刺し、魔界から魔獸の爪を召喚し、ランサーへとソレを放つた。

ランサー「ちいー！」

それをランサーは舌打ちをしながら戒の技を白漫の槍で弾く。

戒『そう簡単にとらせてはくれぬか…。』

ランサー「当たり前だろ？簡単にやられてちや英雄なんて言われねえよ。」

戒『なら少しスタイルを変えるか…「氷華絶掌」セルシウス…！』

戒はシャドウを破棄し、両腕と両足に凍氣を纏う。

ランサー「…無手か？剣道三倍段を知らない訳じゃねえよな？」

戒『知っているわ。だが、俺にはその常識は通用せぬよー…！』

戒は瞬動を使い、ランサーに近づき上段蹴りを放つが寸での所でしゃがみこんで躲し、足払いから連携してリーチを活かした突きを放

つが最初の足払いを跳躍して躰し、突きを虚空瞬動を使い、回避しながら距離を離す。

ランサー「俺と同じ位に速いな…。」

戒『クー・フーリンと同じ位とは光栄の極みだな…。』

話をしながらも両者は休み無く攻撃を繰り出していた。ランサーが突きを放てば戒は腕で軌道を変え掌底を放ち、戒が蹴りを繰り出せばランサーも蹴りで対応しその直後に跳躍し薙払う。

戒『時間も無いしそろそろ終いにするか…。』

ランサー「そうだな…。お互に次の一撃に全てを賭けようか。死ぬなよ?』

そう言つてランサーは両の手に持つた槍に禍々しい魔力を込める。

戒『不死の俺にそれで死ねと言つ事自体難しいと思つただがな…?』

戒は腰を落として右手に氣を練り込みその密度を高める。そして、両者は同時に動いた…。

ランサー「[刺し穿つ…死棘の槍] ゲイ……ボルグ! ! ! !」

戒『凍牙爆碎撃! ! ! !』

初動の踏み込みの速度が速かつたのか、戒の攻撃が先に決まり、ランサーの身体は酷い凍傷に掛かった様になっていた、しかし、刺し穿つ死棘の槍の心臓を穿つという結果を確実に残す因果の呪いで戒

の胸にはゲイ・ボルグが刺さっていた。他人から見ればランサーの勝ちと思われた。

戒『引き分け…か。』

ランサー「だな…。しかし、我が宝具たるゲイ・ボルグを受けて生きている事に俺は驚愕だな…。」

戒『君達の世界の真祖とは若干だが定義が違うのだが、心臓を貫かれた位では死はないよ。…と言つた重傷なのはランサーでは無いのか?先程の技で重度の凍傷の一歩手前まで來てる訳だからな…?』

ランサー「確かにそうだな…。」

戒『俺の過去は今度にして今は休もうか?最初の模擬にしては少しやりすぎたしな』

そう言つて戒はフィールドを元の何もない部屋に戻して、未だに気絶しているセイバーを小脇に抱え、ライダーを肩に担ぎ上げて、凍傷で動きづらいランサーを風で浮かし移動する。

## 第六話（後書き）

「J感想をお願いします。」

## 第七話（前書き）

今回もシリアルに仕上げた積もりですが何か喋り方が違うと思う方や質問のある方はメッセージ若しくは感想板にてお願いします。

## 第七話

ランサー達とルイズ達と上のコテージに戻った戒は……

戒『さて、セイバーとライダーも動ける様になつた事ですから今日はこのまま解散とします。良いですねマスター？』

ルイズ「しようがないわね。アンタの過去はまた今度の機会にでも聞かせてもらいうわ。」

キュルケ「そうね。ダーリンの強さが凄いのが判つただけでも収穫はあつたからね~」

タバサ「……今度戦い方を教えて。」

戒『出来る範囲内では構わないですよ。』

キュルケ「狡いわよタバサ！ねえ、ダーリンわたしも良いかしら？」

ルイズ「だ、駄目よ！？」

キュルケ「あら？なんでヴァリエールが間に入つてくるのかしら？」

ルイズ「わたしがコイツの『主人様だからに決まってるじゃない！』！」

タバサの言葉に戒は了承するとキュルケが便乗するがルイズはそれを阻み2人は口論をしていた。それを余所に戒はランサー達と話を

していた。

戒『ランサー、マスター・ルイズを頼む。』

ランサー「お前はどうするんだ?」

戒『なに、少しばかり用事があるからな…。』

ライダー「用事…ですか?」

戒『ああ。人数も増えた事だし、部屋の確保は「テージで間に合っているが人を匿つたりした時用と考えているが…ランサー達を召喚する前に決闘紛いの事で此処の責任者と話が有るものでな?』

セイバー「上の者と…ですか?ならばわたしも御一緒します。召喚者たる貴方の護衛で行きますので。拒否権はありませんよ?ルイズにはランサーとライダーがいますから問題はありません。」

戒『うーん。まあ、交渉するから取り敢えず連れて行つた方が説明も出来る…か?判つた。セイバーは一緒に来てくれ。ライダーとランサー靈体化してルイズと一緒に授業に出てくれ。』

ランサー「習い事に出るって?詰まらねえな…。」

ライダー「わたしは構いません。」

戒の言葉に2人は…ランサーは渋るがライダーは快諾してくれた。

戒『助かるよ。…ああ、そうだ。ライダー少し良いか?』

ライダー「何か？」

戒『確かに、君は聖杯を得た時の望みは確かにその魔眼を封じ込める事だつたか？』

ライダー「はい。正確には消すですが……。」

戒『消す必要は無いぞ？』

ライダー「どういった事ですか？」

戒『ランサーやライダーは魔術が使えるよな？』

ライダー「はい。ですがそれと魔眼を消さないのと何が関係しているのですか？」

戒『俺は兎も角として、ライダーやランサー……魔術を使える者は魔術回路と言う物があるよな？それを応用すれば魔眼のON、OFFの切り替えが出来るかも知れないと思つたんだよ。』

ライダー「出来るのですか！？」

戒『俺は少し手伝うだけだよ？……少し失礼するぞ？』

そして戒はライダーの頭に手を置き目を閉じて集中し、ライダーの魔術回路とは別に魔眼の制御をする為の回路を作成する。

戒『……これでどうだ？ライダー、少し確認してくれるか？』

ライダー「はい……凄い！確かにわたしの魔眼の力の切り替えが出

来る様になつています。』

戒『そうかそれは良かつた。これで田隠しは要らなくなつたな?』

ライダー「戒…貴方には感謝をしても仕切れません。わたしはこの魔眼が疎ましく感じていましたが、戒の御陰で魔眼の制御が出来る様になりとても嬉しいです。』

戒『俺はそんなに大それた事はして無いよ。ただライダーの魔術回路があつたからそれを参考にしただけに過ぎないからな…?』

ライダー「それでも…ですよ。』

戒『なら、素直に受け取つて置くよ。』

ランサー「ライダーの願いは叶えて俺達の願いは叶えてくれねえのか?』

戒『確かにランサーの場合は互いの誇りを賭けた戦いが出来る事だろう?それなら、大分先になるが確実に出来るから待つ正在してくれ。セイバーの願いは叶えてやる事は出来ない…。』

セイバー「何故ですか!?』

戒『過去の出来事はどうする事も出来ない…ただそれだけだ。』

セイバー「……貴方は本当に何でも知つてているのですね。』

戒『なら、言い方を変えよう。セイバー、君は何故に王になつと決意した?』

セイバー「それは……」

戒『平和にする為に……だろ？なら逆にセイバー……いやアルトリア以外の王では国は存続は出来なかつた筈だよ？アルトリアは自分は間違つた王だと思つてゐる様だがそれは違つ。お前の行つて来た事は後世には名君として語り継がれ、今も昔と変わらずに君は皆の中で英雄として違わぬ物だ。だから、間違つていたと思わないでくれ。』

セイバー「貴方にわたしの何が判ると言ひのですか！…」

戒『判るよ……俺だつて前の世界では英雄に近い扱いをされた事もあるし、失敗をすれば自分は間違つていたんじや無いのか？つてな？だけどな、それは違つた。』

セイバー「何が違つと言つのですか！…わたしは自分のした過ちを清算したいと思って何が悪いのですか！…」

戒『本当にそれは過ちだったのか？いや、過ち』

セイバー「それはどうこつ意味ですか？わたしのやつた事は過ちでは無いと言つのですが！…』

ルイズ「ちよ、ちよとどうしたのよー？」

ランサー「嬢ちゃんちよつと黙つてな？」

ルイズ「なんどよー明らかに言い争つてるんだから止めるべきでしょー？」

ライダー「それは違いますよ、ルイズ。戒はセイバーの願いは叶えられないと言つていいだけです。」

ルイズ「願い事？それは一体何なのよ？」

ライダー「それは本人から聞くべき事です。わたしから話せても当事者の話を聞くのでは語弊が有りますから。」

ルイズ「そう…ね。判つたわ。じゃあアイツに任せてわたし達は授業に出るわよ？」

ランサー「退屈だが行かねえとだな…。」

ライダー「ランサー、習い事は基本的に受けなければいけないのですからそういう事は言わないで下さい。」

ランサー「わあつてゐるよ…じゃあ、嬢ちゃん達はライダーも一緒に行くんだから俺は靈体化して見学させて貰うわ…。」

そしてランサーはその場から消え、ルイズ達はライダーと一緒に学院に戻つて行つた。そして、戒達はその場でまだ話をしている。

戒『……そうだ。アルトリアがそうだと呴つとも俺は違つとも思つ。』

『

セイバー「では自國を守る為に村一つ焼き落としたとしてもですか！？他の方法もあつた筈なのに……」

戒『だが、それ以外思い付かなかつたのだろう？それにお前がそれを否定しやり直したとして、それ迄お前に付き従つた臣下共を否定すると言つのか？』

セイバー「違います！！彼等はわたしと共に一緒に戦ってくれていたのです！そんな彼等をわたしが否定する訳には……」

戒『ならばそれで良いじゃないか…アルトリア、君はアーサー王として民草や臣下に慕われていらない訳じゃなかつた筈だ。そんな君が自身を否定したらいくら選定の剣を抜いたからと言つて付き従つてはくれなかつた筈だよ？非情になる事を知らない一部の臣下は判らないがな？』

セイバー「わたしは間違つていなかつたのでしょうか。」

戒。『その証明は俺の前にいた世界の更に前の世界が証明しているよ。アルトリアがを目指した平和な世界には近付いていたよ。まだ小さな争いは確かに在ったがそれでも一部の国では争いを知らずに平和に暮らしていたよ。時間は必要だろうが自分のやつて来た事に自信を持てとは言わぬが胸を張つて歩んでくれ。』

セイバー「はい。」

瞳の端から涙を流すセイバーに戒は髪を梳きながら抱く。まつたく理由を知らない者ら見たら恋人の様にも見えるが戒はそれを気にしないで暫くセイバーの髪を梳いて離れた。

戒『落ち着いたか?』

セイバーは、はい / / / / / / / / / / /

戒の言葉にセイバーは顔をトマトの様に赤くしながらも返事をした。  
どうやら先程のやり取りでセイバーは戒に落ちてしまった様である。

戒『それは絶対無いからな！？』

セイバー「？？？ビ、どうしたのですか？」

戒『い、いや、不穏な物を感じた物でな？』

セイバー「は、はあ？」

戒『んん！取り敢えず、当初の予定通りに此処の学院長に会つて交渉するとしよう。セイバー、改めてになるがこれから宣しく頼む。まあ、令呪がある時点で変な氣もするがな…。』

セイバー「はい！此方こそ改めて言います。ここに契約は完了した。我が剣は貴方と共に、貴方の運命はわたしと共ににある。マスター、指示を…。」

戒『じゃ、今は学院長の所に行くから一緒に行こうかアルトリア。』

セイバー「はい！」

そして、戒はセイバーと一緒に学院の中にある学院長室に向かって行く。

オマケ

戒『そう言えばアルトリアは鎧の他には何も無いのか?』

セイバー「?はい。わたしは戦士ですから」の身に纏つのは鎧だけですね。」「

戒『ちょっと待つてろよ？えーと、あつたあつた。【着せ替えカメラ】～～！これに衛宮家で着てた服の写真をいれてつと。セイバー、そこから動いたら駄目だぞ？』

セイバー「は、はい!」

”カシャッ！！”

セイバー、「これは？」

カメラに撮られた瞬間にセイバーの姿は鎧姿ではなく、白のワンピースのような長袖の様なシャツに青のロングスカートとFate/stay nightの衛宮邸で着ていた私服姿に変わっていた。

戒『何時までも鎧姿だと味気ないからな？それに私服姿も似合つて  
いるぞ？』

セイバー「そ、そうですか// // // // //」

戒『それじゃ、行こうか？』

## 後書き

作者「出来たあ――――――！」

戒『一体なんだコレは！』

作者「最後の事か？」

戒『セイバーを加入させたのも最後のアレを言わせたいだけだった  
んじゃないだろうな？』

作者「ソ、ソンナコトナイヨ？セイバーはその生き方や在り方も好  
きだし、あの台詞も痺れる物があつたからな：」

戒『はあ、もう良いわ』

作者「では、次回の話では学院長とのお話ですが、若干のキャラ崩  
壊が見受けられるかも知れませんがご了承下さい。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0842p/>

少年の異世界戦記～ゼロの使い魔編～

2011年5月13日00時11分発行